

岩 井 城 跡

但馬空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年3月

兵庫県教育委員会

いわ い じょう あと
岩 井 城 跡

1994年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県豊岡市岩井字河谷、字湯舟・上佐野字清水田和に所在する、**岩井城跡の発掘調査報告書**である。
2. 遺跡の発掘調査は、但馬空港建設に伴い、兵庫県但馬空港建設事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 各年度の調査の体制は以下のとおりである。
- 平成2年度確認調査（遺跡調査番号 900045）
- 調査担当者：山田清朝・山上雅弘・山本誠
- 調査期間：平成2年7月2日～4日
- 平成2年度確認調査（遺跡調査番号 900173）
- 調査担当者：村上賛治・山上雅弘・中村 弘
- 調査期間：平成3年3月19日
- 平成3年度確認調査・全面調査（遺跡調査番号 910001・910002）
- 調査担当者：平田博幸・藤田 淳・高井治巳
- 調査期間：平成3年4月25日～12月26日
- 整理作業
- 整理期間：平成4年度にすべての作業を実施。
4. 整理作業は、平成5年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。
5. 本文中に表した標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とし、方位は断りがない場合、国土座標（第V系）を用い、磁北を使用する場合はM.N.と表記している。
6. 図1・4の地形図は、国土地理院発行 1:50,000地形図「出石」「城崎」を使用している。
7. 本書の執筆は、兵庫県教育委員会文化財調査事務所平田博幸・藤田淳・山上雅弘・高井治巳が行い、藤田が編集を担当し、古谷章了が補佐した。文責は目次に示すとおりである。
8. 写真図版に用いた写真のうち、遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、航空写真は（株）アジア航測に委託して行った。
9. 本書にかかる写真・図面・遺物などは兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）および魚住分館（明石市魚住町清水字立会池ノ下630-1）に保管している。
10. 本書に用いた写真のうち、遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真は三宮写真館に委託して撮影を行った。
11. 図10に用いた鳥瞰図はTak. OHI作成のソフトウェア「BIRD EYE'S VIEW」を用いて作成したものである。作成にあたっては、（株）アジア航測に航空測量のデータの使用を快諾いただいた。
12. 発掘調査から報告書作成に至る間下記の方々に御教示・指導を頂いた。記して感謝を表する。
- 村田修三（奈良女子大学）、瀬戸谷 眞（豊岡市郷土資料館）、潮崎 誠・宮村良雄（豊岡市教育委員会）、加賀見省一（日高町教育委員会）、谷本 進（八鹿町教育委員会）、小寺 誠（出石町教育委員会）、西尾孝昌（兵庫県立豊岡南高校）、山根実生子（養父郡町村会）のみなさん（敬称略・順不同）

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯	[平田] (1)
第2節 調査の経過	[平田] (2)

第Ⅱ章 位置と歴史的環境

第1節 繩紋時代～平安時代	[高井] (5)
第2節 中世～戦国期	[高井] (7)

第Ⅲ章 岩井城跡の調査

第1節 遺構の概要	[藤田] (11)
第2節 遺構	
1. 西第3郭先端	[藤田] (14)
2. 西郭	[藤田] (17)
3. 主郭	[平田] (21)
4. 北郭および北尾根	[平田] (27)
5. 東郭	[高井] (30)
第3節 遺物	
1. 陶器	[平田] (36)
2. 金属器	[藤田] (36)
3. 石器	[藤田] (37)

第Ⅳ章 岩井城下層古墳と炭窯の調査

第1節 岩井城下層古墳	
1. 墳丘と上体部	[平田] (38)
2. 遺物	[藤田] (38)
第2節 炭窯	[平田] (40)

第V章 まとめ

第1節 岩井城の築城過程

1. 築城過程	(42)
2. 土量の計算	(42)
3. 作業量の検討	(43)
4. 最後に	(44)
第2節 調査の成果から	(49)

挿 図 目 次

図1	遺跡の位置 (1/50,000)	(vi)
図2	工事予定地と確認調査トレッチの位置 (1) (1/2,000)	(3)
図3	確認調査トレッチの位置 (2) と全面調査の範囲	(4)
図4	岩井城周辺の遺跡 (1/50,000)	(6)
図5	岩井城周辺の城跡 (1/100,000)	(9)
図6	調査前地形図	(12)
図7	岩井城跡全体図	(13)
図8	堀切・土塁周辺	(14)
図9	堀切土塁断面図	(15)
図10	土塁堀切周辺鳥瞰図	(16)
図11	集石1	(18)
図12	虎口1	(19)
図13	西第1郭西第2郭	(19)
図14	西第3郭	(20)
図15	主郭・北第1郭	(22)
図16	主郭裏張り復元図	(23)
図17	主郭盛上除去後	(23)
図18	主郭断面図	(24)
図19	主郭土層断面パネルダイアグラムと断ち割り状況	(25)
図20	通路と虎口2(左)・集石2(右)	(26)
図21	北尾根	(28)
図22	北第2郭	(29)
図23	東第1郭東端断面図と断ち割り状況	(30)
図24	東第1郭	(31)
図25	東第2郭	(32)
図26	犬走り	(33)
図27	東第2郭・犬走り断面図	(33)
図28	虎口3	(35)
図29	出土遺物(1)	(36)
図30	出土遺物(2)	(37)
図31	岩井城下層古墳主体部と出土遺物	(39)
図32	炭窯	(41)
図33	盛上切土の造成図	(45)
図34	土量計算図(1)	(46)

図35 土量計算図(2) (47)

付図1 岩井城全体図

表 目 次

表1	周辺の遺跡-観察表	(7)
表2	山城一覧表	(9)
表3	土量計算表	(48)

図 版 目 次

巻首図版1	1.遺跡遠景 (西から)	2.岩井城跡全景 (北から)
巻首図版2	1.調査前全景 (南から)	2.調査後全景 (南から)
巻首図版3	1.主郭全景	2.土塁掘切全景
図版1	1.遺跡遠景 (北から)	2.同上 (西から)
図版2	1.岩井城跡遠景 (南から)	2.同上 (東から)
図版3	1.主郭～堀切全景 (東から)	2.主郭～東第2郭全景 (南から)
図版4	1.調査前全景 (西から)	2.同上 (東から)
図版5	1.堀切調査前	2.土塁調査前3.同右4.虎口調査前5.同右
図版6	1.堀切周辺全景	2.同上
図版7	1.土塁全景	2.同上
図版8	1.虎口1 全景	2.同上
図版9	1.集石1	2.同上
図版10	1.堀切上層堆積状況	2.堀切完掘状況
図版11	1.土塁北面土層堆積状況	2.虎口1 土層堆積状況 3～8.土壠断ち割り状況
図版12	1.土塁周辺盛土除去後	2.同上
図版13	1.西第3郭調査前	2.同調査後
図版14	1.主郭～西第3郭調査前	2.同調査後
図版15	1.主郭	2.同上
図版16	1.西第1郭西第2郭	2.同上
図版17	1.通路1	2.同上

- | | | | |
|------|---|---------------------|----------------------|
| 図版18 | 1.虎口 2 | 2.集石 2 | |
| 図版19 | 1.主郭盛土除去後 | 2.同上 | 3・4.同左 |
| 図版20 | 1.東第1郭・東第2郭調査前 | 2.同調査後 | |
| 図版21 | 1.東第1郭 | 2.東第2郭 | 3.同上 |
| 図版22 | 1.東第1郭北西端部 | 2.虎口 3 | |
| 図版23 | 1.北東第1・2郭 | 2.通路 2 | |
| 図版24 | 1.北尾根 | 2.同上 | 3.同上 |
| 図版25 | 1.北第1郭 2.北第1郭土層堆積状況 | 3.北第2郭土層堆積状況 4.北第2郭 | |
| 図版26 | 1.各曲輪平坦部土層堆積状況 (1.西第3郭 2~4.西第1郭周辺 5.主郭 6・7.東第1郭
8.東第2郭) | | |
| 図版27 | 1.古墳全景 | 2.主体部完掘状況 | 3.主体部土層堆積状況 4.鉄鎌出土状況 |
| 図版28 | 1.炭窯全景 | 2.同上 | 3.炭窯左壁 4.炭窯煙道部 |
| 図版29 | 周辺の山城跡 (1.比闕山城 2.有子山城 3.亀ヶ崎城 4.尼城 5.一開山城 6.加陽城
7.宮井城 8.鶴城) | | |
| 図版30 | 1~4.調査風景 | 5.但馬空港 | |
| 図版31 | 出土遺物 | | |

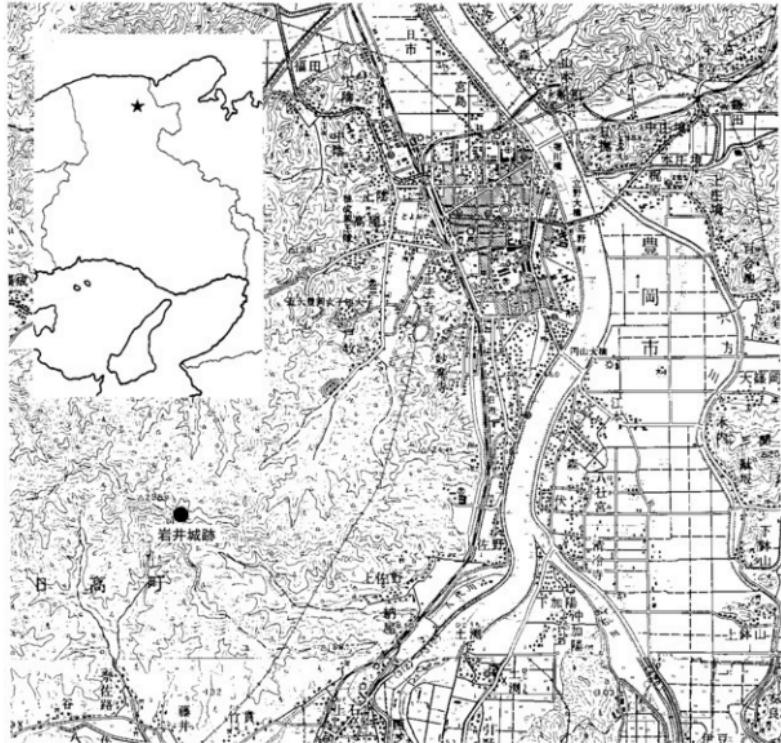


図1 遺跡の位置 (1/50,000)

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

関西は今新しい空の時代を迎えようとしている。大阪府泉州沖の海上では、日本初の本格的な海上空港である「新関西国際空港」の建設工事も順調に進み、24時間利用可能な不夜城空港がほぼその全容を現しつつある。世界に開かれた新しい門戸が関内に誕生するわけでもあり、近畿地域をはじめとしてその周辺地域に及ぼす経済的・文化的波及効果は未知数ながら、決してマイナス要因となる要素を見付けだすことはできない。関西新時代の到来を告げている。

この関西国際空港、さらに既存する大阪（伊丹）空港をキーステーションとして、近畿圏の空の様相も大きく様変わりしつつある。近畿各府県とも、空を有効利用した新コミュニケーションシステム構想に乗り出しているが、そのトップランナーとなっているのが兵庫県である。

兵庫県は広大な県土を2時間で結ぶために、中国縦貫自動車道・山陽自動車道・近畿自動車道等高速道路の整備を進めるとともに、より効率的でしかも短時間に各地を結ぶ交通手段として、県下に3箇所の近距離コミュニケーション空港建設の構想をいち早く打ち出している。そのひとつは神戸沖を埋め立てる「神戸空港」、第2が姫路市北方の内陸部に聞く「播磨空港」、そして北部但馬地域を結ぶ「但馬空港」の3空港である。いずれも地域と密着し、特徴ある3地域を有効に結びつけるための三つ巴として、いづれが欠けても成り立たない性格のものである。いづれとも現大阪空港をとおして、世界に向かって飛び立つことも可能な空港である。

この3空港のうち、その事業が最初に具体化したのが但馬空港である。運輸省の推進する地域空港整備計画に伴う認可を得て事業の開始された「但馬空港」の建設地として、最終的に但馬地域の中核となる豊岡市とその南に隣接する日高町にまたがる丘陵地帯の一角に建設されることが決定した。

空港が建設されるような地理的に好条件のもとには、得てして遺跡も多く存在している。工事の実施に先駆けて兵庫県土木部空港鉄道整備室より埋蔵文化財の分布調査の依頼を受け、空港建設予定地および侵入路候補地の調査を昭和60年11月に実施したところ、空港予定地内の山頂部に山城（岩井城跡）が存在し、侵入路部分には大規模な古墳群（ホーキ古墳群）が存在していることが明らかとなった。

空港鉄道整備室では予想以上に多く存在した古墳群を避けるため、侵入路の計画地を上佐野地区に変更し、改めて計画地域の分布調査の依頼がなされた。この依頼にもとづく昭和62年12月の分布調査によって、遺跡の存在する可能性のある地点を3箇所確認した。

平成2年4月には空港予定地内の岩井城跡の再分布調査を行ない、中心曲輪と周辺に伸びる尾根部に城跡に開通すると思われる箇所を8箇所確認した。

以上の分布調査の結果にもとづき同年より確認調査が実施されるにいたった。

第2節 調査の経過

平成2年4月の再分布調査で遺跡の存在する可能性が考えられた地点の内5箇所（図2①～⑤）については同年7月にトレンチによる確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。平成3年3月には城跡の東側に位置する尾根鞍部（図3①）の確認調査を行なった。この2回の調査により、城跡および他の遺跡が「岩井城跡」の西方と南方には存在しないことが判明した。

以上の確認調査結果にもとづき土木部但馬空港事務所と協議を行い、山城「岩井城」跡の全面調査とその北と西に伸びる尾根部の確認調査を行なうこととなった。

平成4年度の調査では、中心曲輪域の全面調査に先行して、まず北と西に伸びる尾根部に6本のトレンチを設定し、遺構の広がりを把握するための確認調査を行なった。北尾根に設定した8トレンチでは地山整形による平坦地と段を、9トレンチでは地山整形の段、帯廓状の平坦地とそれに伴う溝の存在を確認した。その北東の12・13トレンチでは遺構・遺物とも確認できなかった。西方の10トレンチ・11トレンチでは、登城道と思われる細長く続く平坦地を確認した。

以上6本のトレンチ調査の結果、8・9トレンチを設定した北方尾根上には城の曲輪が展開しており、10・11トレンチを配した西方には西の奈佐谷からあがってくる登城道が設けられる形態の城跡であることが判明した。これにより、中心曲輪域とあわせてこの範囲も全面調査対象域に含めることとした。

遺跡自体がやせた山頂部に位置するため、全面調査に際しての調査域は、基本的に曲輪軒部から傾斜に沿って15から20m下方までとしたが、現地の地形状況に則り若干変則的な設定とした。とくに登城道に相当する範囲は、遺構自体が細長いためこれに沿った5m前後をその範囲とした。また調査前の樹木の伐採およびその搬出は但馬空港事務所で実施して頂き、調査は現状の地形測量と人力による掘削から着手した。

調査は東第2郭の東肩部およびその下方にある犬走り部分の人力掘削から開始し、北東と南に伸びる急峻な尾根を下った後尾根筋に登り、東第2郭から東第1郭と西廻し、主郭部分に取りつく。その後は西第1・2・3郭を経て虎口部へ進み、堀切を渡って登城道域へと入る。その後北尾根域へと展開し、炭窯を掘り上げて城跡関連遺構の調査を完了した。ただ最終の主郭部分の立割り調査に際して、その下層で古墳の木棺直葬形態の主体部を検出したため、改めて主郭に伴う盛土をすべて撤去し、下層古墳の調査完了を以て同年12月に現地での調査をすべて終了した。

本報告書の作製については土木部空港鉄道整備室と協議を重ねた結果、但馬空港建設事業が継続されている間に行なうものとして、現地での発掘調査が終了した翌年の平成5年5月より兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区）において整理作業を開始した。

出土遺物に関しては、遺跡が山城跡であった関係上出土種類・点数ともわずかであったため、上器に関しては、洗浄を現地において終了した。埋蔵文化財調査事務所においては、上器の接合以降の作業を行なった。古墳の主体部より出土した鎌をはじめとする鉄器については、本事務所において保存処理を施した。

以後、遺物・遺構図版の作製、遺物の写真撮影ならびに原稿執筆等の一連の作業を平成5年度で終了し、本報告書の刊行に至った。

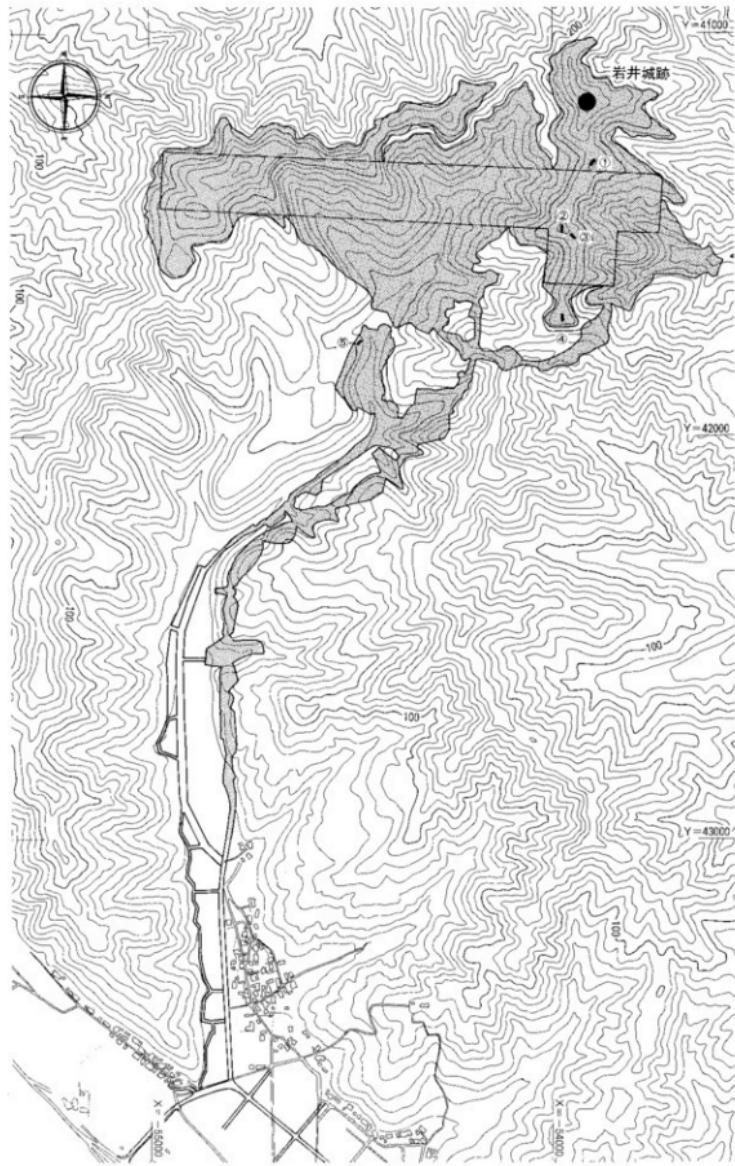


図2 工事予定地と確認調査トレンチの位置（1）(1/2,000)

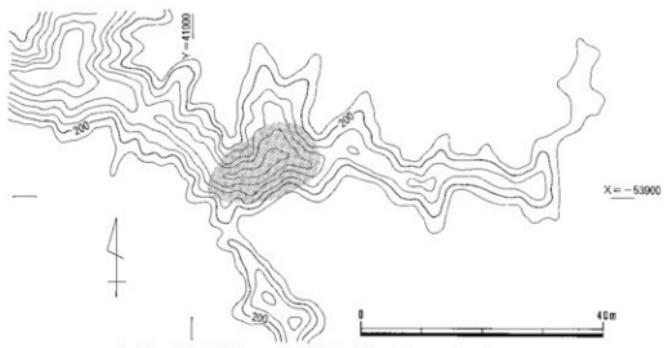
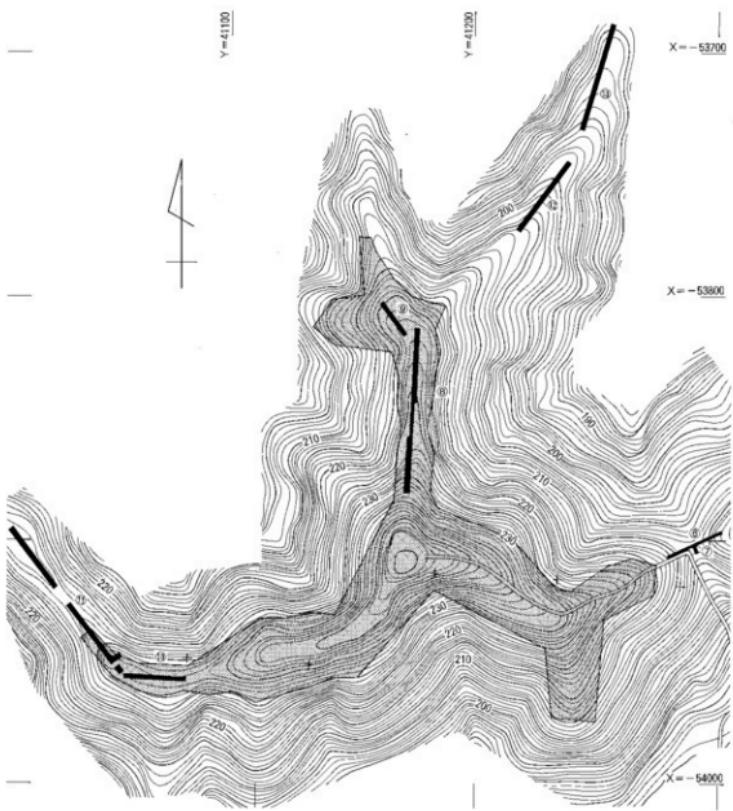


図3 確認調査トレンチの位置（2）と全面調査の範囲

第Ⅱ章 位置と歴史的環境

岩井城は豊岡市と日高町の市町境の山頂に位置する。日高から豊岡をとおり日本海へとぬけていく峠道が岩井城の西尾根筋にあり、近年にいたるまで交通路として利用されてきた。同城は上記のように平野部からはなれた海拔245mのけわしい山頂部にあるため、周囲に他の遺跡はほとんど存在しない。そこで本章ではその対象範囲を広くとり豊岡市、日高町の主な遺跡について時代を追ってみていきたい。

第1節 繩紋時代～平安時代

繩紋時代

奈佐谷の最奥部に位置する辻遺跡（1）があげられる。各時期の遺物を含む複合遺跡であるが繩紋時代に属する土器の主流をなすのは、後期の中津式・福田KⅡ式のものである。特に大型石棒・石柱類は近畿地方に於いて最も古い位置を占めるものである。

弥生時代

式内社女代神社境内に存在する女代神社遺跡（2）からは多量の弥生土器が出土している。女代神社周辺には微高地が発達しているため、付近に弥生時代の集落の存在が考えられる。また亀ヶ崎遺跡（3）では、標高60m余りの尾根上から弥生時代中期の住居跡が発見され、石鎧を作る際の石片や鶏卵大の河原石などが見つかっており、弥生時代中期の高地性集落と考えられている。

古墳時代

岩井城の東、豊岡盆地に面する尾根筋には古墳が群在している。円山川流域の中でも特に古墳の密集度の高い地域である。納屋ホーキ古墳群（4）約150基、雷神社古墳群（5）約60基、勝妙寺谷古墳群（6）約200基、西光谷古墳群（7）約60基、などが知られている。雷神社古墳群は低壇丘の円墳で構成されるが他の古墳群は但馬特有の階段状の形状をなす。方墳も含むがほとんどが小円墳であり、その時期は5～6世紀と考えられる。一部にホーキ古墳と（8）見手山古墳（9）の2基の前方後圓墳が含まれている。見手山古墳は調査の結果6～7世紀前半の横穴式石室を内部主体としていることが判明している。妙楽寺遺跡（10）では弥生時代から古墳時代にかけての過渡期の墓制が調査されている。また上佐野の最奥部には30基余りの上佐野古墳群（11）があるが、この周囲には数少ない横穴式石室を内部主体としている。

岩井城の南、奈佐路から日高町国分寺にかけての円山川沿いの平野に面する山の尾根筋にも、大木谷古墳群（12）をはじめとして計200基余りの古墳があり、円山川対岸の尾根筋も80基の溝仲谷古墳群（13）など多くの古墳群が存在するが、その中に大型の横穴式石室をもつ掘縫古墳（14）がある。



図4 岩井城周辺の遺跡（1／50,000）

表1 周辺の遺跡一覧表

遺跡名	所在地	遺跡名	所在地
1 辻遺跡	豊岡市辻下畠	11 上佐野古墳群	豊岡市上佐野花ノ木
2 女代神社遺跡	〃 上町宮の下	12 大木谷古墳群	日高町藤井字大木谷
3 亀ヶ崎遺跡	〃 福田向山	13 満仲谷古墳群	〃 上郷字満仲谷
4 ホーキ古墳群	〃 上佐野ホーキ他	14 植鍵古墳群	〃 鶴岡字森垣
5 雷神社古墳群	〃 佐野稻葉他	15 称布ケ森東遺跡	〃 称布字称布ケ森
6 謹妙寺谷古墳群	〃 上町謹妙寺谷他	16 称布ケ森西遺跡	〃 称布字称布ケ森
7 西光寺谷古墳群	〃 上町西光寺谷他	17 但馬國分寺	〃 国分寺
8 ホーキ古墳	〃 上佐野ホーキ	18 深田遺跡	〃 水上字深田
9 見手山古墳	〃 妙楽寺大谷	19 川岸遺跡	〃 松岡字川岸
10 妙楽寺遺跡	〃 妙楽寺大谷	20 但馬國分尼寺	〃 水上字尼堂

奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代の律令期にあっては、地方統治機関である但馬国府が日高町国府周辺に推定されている。近年国道312号線のバイパス工事に伴う調査により、但馬国府の所在を思わせる官衙的要素の強い遺物が多数出土した。周囲の称布ケ森東遺跡(15)、称布ケ森西遺跡(16)、川岸遺跡(19)、深田遺跡(18)等では、木簡、木履、楓扇、墨書き器、瓦などの遺物が発見されている。国分寺跡(17)は発掘調査で伽藍の一部が明らかになっており、日高東中学校の敷地には国分尼寺(20)が存在していたものと考えられている。

第2節 中世～戦国期

但馬では現在200以上の山城が確認されている。それらの城跡は鎌倉時代から江戸時代初期の長期間に累々と築かれたものであり、その間におびただしく改築を繰り返しているため同時期にすべての城が機能していたわけではない。また現在の山城の遺構が改築される以前はどのような山城だったのかも判明せず、一括して現在残る山城の機能や関係をとらえることは難しい。

発掘調査されているおもな山城は尼城跡や備後衆山城などがあるが、その全域を調査したものはない。備後衆山城跡の調査では「橋がかり」状遺構などの興味深い遺構が発見されている。

上記のとおり発掘調査件数が限られるため、但馬地域で山城が多く造られた南北朝期から織田信長の但馬支配までの期間に属する拠点的山城と合わせて文献資料をみてゆくと、南北朝の動乱期、但馬では北但馬は南朝方（三關山城・進美寺城）南但馬は北朝方に属するというように国を三分して戦うが、但馬における主戦は円山川沿いの平野部に展開するため、山城もこの頃から円山川流域に多く作られるようになる。

1343年に山名氏が但馬守護（此属山城・九日市の在所）となると但馬は、織田政権に入るまでの間、山名氏の支配が続くこととなる。山名氏は明徳の乱で領地を一時失うが応永の乱の後再び再興し、幕府有数の守護大名となる。嘉吉の乱で播磨の地を得るがその後、播磨赤松氏とは、所領をめぐって争いが長く継続する。

応仁の乱（1467～1473年）の後、山名氏の勢力が衰退してゆく中で垣屋氏（宵田城・楽々前城・轟城）など有力国人の台頭により混沌とする中、戦国時代を迎える。以下豊臣秀吉の但馬征伐の間の行動は下記の年表のとおりである。

- 永禄12(1569)年 秀吉、但馬に出兵し此隅山城などの諸城を攻略。
山名祐豊、献納金で但馬に復帰しその後有子山城を築城する。
- 天正2(1575)年 山名祐豊、吉川元春と芸但同盟を結ぶ。
田結莊是義は毛利氏と連携する山名氏家臣團の中にあって織田色を濃厚にしてきたため、垣屋豊続は田結莊は義の鶴城を奪取する。
- 天正3年 秀吉、但馬竹田城を攻略、秀長に但馬を支配させる。
- 天正7(1579)年 7月 吉川元春、垣屋豊続の懇請により轟城（竹野町）に出兵。
9月 吉川元春、但馬より撤退する。
- 天正8(1580)年 5月 有子山城落城し但馬山名氏滅亡する。
6月 垣屋豊続等但馬勢が水生城に集結し水生表の合戦で一時勝利を得るが敗戦し、但馬は織豊政権下となる。

山名氏の勢力は応仁の乱の間に播磨、備前、美作などの領地を赤松氏に奪われ、その後の奪回も思うようにならず、家臣の反乱に遭うなどして、しだいに衰えてゆき、尼子、毛利、織田などの戦国大名のなかで泳ぎ廻るようになる。おそらく但馬の多くの城はこの戦国期の動乱のなかで多く作られたのである。

永禄12年8月織田軍勢に此隅山城は攻め落とされるが、その後山名氏は有子山城を築き毛利氏と提携する。この芸但同盟に反対する田結莊氏を垣屋氏は天正3年鶴城に落とす。天正8年には有子山城が落城し、垣屋氏らが水生城にたてこもり抵抗したが落城し、但馬は織田の勢力下となった。現在竹田、八木、有子山城などに残る石垣の遺構はこの織田の勢力下になったときのものと思われる。

以下に中世～戦国期の主な山城について述べる。

此隅城

室町時代に築かれ、室町期の遺構が残る古いタイプの山城であり、南北に50m、幅10mの主郭を中心とし北西側及び北東側で各200m南側で約100mの間 尾根上に梯郭式に構成されている。山麓の坪井地区には東西約100m南北約50mの平地があり小字名を御屋敷という。そこには入佐川の流れを利用した掘りもめぐらされていたようであり、また此隅山へ続く裏山の尾根筋には、千疊敷と呼ばれる大郭をはじめ、多数の郭があり、南東部の宮内側丘陵上にも寺跡を思わせる大郭が構成されている。

宵田城

日高平野の南部に突き出た標高150mの山頂に築かれている。江原市街地を眼下に望み北は豊岡方面を南は八鹿方面を望む要衝の位置にある。城の北部、東部、南部は急峻で稻葉川が掘りのようにめぐって流れている。頂上の本丸は幅25m長さ45m長楕円形の広い平地が作られ、石垣が僅かに残っている。

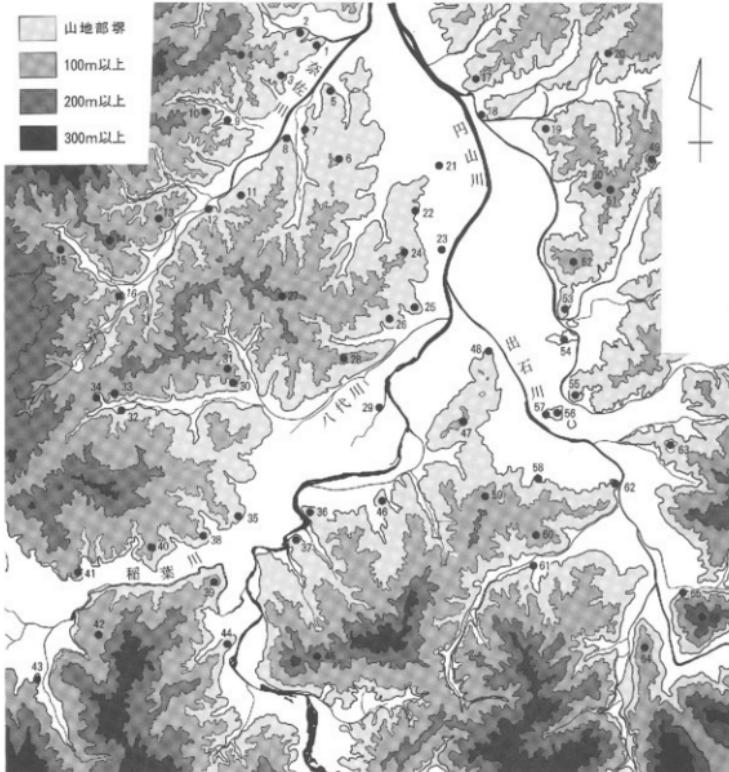


図5 岩井城周辺の城跡 (1/100,000)

表2 山城一覧表

1	亀ヶ崎城	12	大谷城	23	九日の在所	34	宝城砦	45	蓮美寺城	56	福居の城
2	海老の手城	13	小畠城	24	比丘尼城	35	国分寺城	46	上郷城	57	伊豆城
3	丸山の砦	14	石谷城	25	佐野の砦	36	伊福城	47	引野城	58	大谷砦
4	新堂古城	15	目坂城	26	雷神社前の館	37	来の山の砦	48	加陽城	59	中の郷城
5	福田城	16	石屋の城	27	岩井城	38	赤布の城	49	市場城	60	荒木城
6	高麗城	17	錦城	28	水生城	39	宵田城	50	河谷城	61	細見城
7	尼城	18	偏後衆山城	29	芝の城	40	久斗の城	51	砦跡	62	鳥居城
8	小城鼻の砦	19	樋口の城	30	谷成城	41	篠が森城	52	三間山城	63	此瀬山城
9	南殿の砦	20	馬路の城	31	八代城	42	業々前城	53	下鉢山城	64	中村城
10	宮井城	21	豊岡城	32	南山砦	43	森山の城	54	上鉢山城	65	出石城
11	岩本城	22	妙楽寺城	33	奥八代の砦	44	岩山城	55	安良の城	66	有子城

本丸には西側と東側に続いて長さ約35mにわたって土塁が残っている。郭は本丸の西側に2段、東側に3段つくられている。なお南面に3ヶ所の郭がある。

水生城

標高160mの水生山頂にある。本丸跡と見られる頂上部は東西約20m南北約30mの広さがあり、西部から北部にかけて土塁が残っている。水生城山腹には長楽寺がある。この寺から本丸に至る間に4段の郭があり、本丸の西方には幅15m長さ50mの広さの郭が築かれその西に小さな段がつくられている。本丸からは国府平野、出石、豊岡方面が遠望される戦略上重要な位置にある。

出石城

海拔約40mの福音郭(55m×40m)を最上段に、本丸(30m×74m)、2の郭(65m×37m)、2の郭下部(71m×28m)、3の郭(250m×200m)と5段に分かれて有子山を背景に北向きに面している。石塁の高さは上段から12.8m、5.1m、6.9m、3.9mある。

有子城

有子城は海拔324m、山麓の子人町から比高311mにあって本格的な山城である。本丸の郭跡部分は東西約43m南北25m、西と北の2辺に高さ3mの野づら積みの石塁をもち、西の丸部分の石塁の高さは5mある。

鶴城

標高107mの山上(広さ約2100m²)に、周辺に大小7つばかりの郭を構築し、北東側尾根つづきには、自然の谷を利用した深い堀切を持つ。主郭直下の東側郭には井戸があり尾根つづきに100m北によった山頂は、主郭より8m高い郭(約200m²)で、そこには土塁も残っている。なお、この山塊の4つの尾根の先端部には、それぞれ郭が設けられている。下の宮の谷をへだてた南700m先の日撫の丘陵には備後衆山城があり、北側の金剛寺谷をへだてた800m先の山の突端部にも3つばかりの階段上の平地があり、出城と考えられる。



岩井谷口から岩井城を望む

第Ⅲ章 岩井城跡の調査

第1節 遺構の概要

岩井城跡は文献にまったくその名を残さない城跡である。わずかに「奈佐太郎」に関する記述が、散見されるに過ぎない。しかしながら、曲輪の遺存状況は良好で、現地を一見するだけで城跡であること明かであった。発掘調査を開始するにあって、事前に実行した地形測量で確認した曲輪や堀切、土塁などはおむね、調査後にも同様に確認できた。

図6に調査前の地形測量にもとづく曲輪配置を示す。最高所には台形の平面形を呈する主郭が位置し、これをを中心に東西に「八」字状に各曲輪が展開する。

西側へは2段の小規模な曲輪を介して、「く」の字に折れ曲がる長大な西第3郭が連なる。西第3郭の先端には「コ」字形に低い土塁が巡り、その外側は堀切が尾根を切断するが、現状では埋土が堆積し土橋状の通路となっている。堀切の北端からは、通路1が西第3郭の裾を巡るが、西第3郭先端から横矢掛かりになる。この通路は土塁の途切れる当たりへと繋がりここに虎口を設けている。

東側には、西第3郭の半分くらいの規模の二つの曲輪がやや屈曲して連なり、先端部には幅狭い犬走りがとりつく。犬走りの先では尾根筋が二又に分かれ、それぞれに曲輪の可能性を想定した平垣部が存在したが、全面調査の結果、曲輪では無いことが判明した。また、東第1郭先端部の北斜面には二段の小規模な曲輪が設けられている。

東第1郭と東第2郭は南斜面側の虎口で結ばれており、東第1郭と西第3郭は主郭の南斜面を走る通路で結ばれている。この通路から主郭への虎口がとりつく。

以上が、発掘調査前の地形測量によって得られた曲輪配置の概略である。発掘調査によっても基本的にはほぼこうした曲輪の関係を追認することができた。しかし、いくつかの点では、新たな事実が判明したので、以下に簡単に列挙する。

まず、曲輪配置の上では、主郭北側斜面とそれから北へ延びる尾根に、新たに二ヶ所の小規模な曲輪が確認できた（北第1郭・北第2郭）。両曲輪とも調査前の地形の観察では下草の除去が不十分なためまったく気がつかず盲点であった（ただし、北第2郭については平垣面が岩井城に付属するものであると断言するに十分な根拠は乏しい）。東第2郭と北東第1郭については東第1郭の裾を回って通路でつながっていることが明らかとなった。

虎口形態では東第1郭と東第2郭を結ぶ虎口が直線的ではなく折れ曲がる形態を呈することが明らかとなった。

土橋状を呈していた堀切は、深く尾根を斬ち切っていることが確認できた。堀切の底と曲輪内部との比高差は4m近くに達する。また主要な曲輪のラインはより直線的になった。これは特に主郭において顕著である。東第1郭では曲輪の中程に小さな段が存在することが明らかとなった。

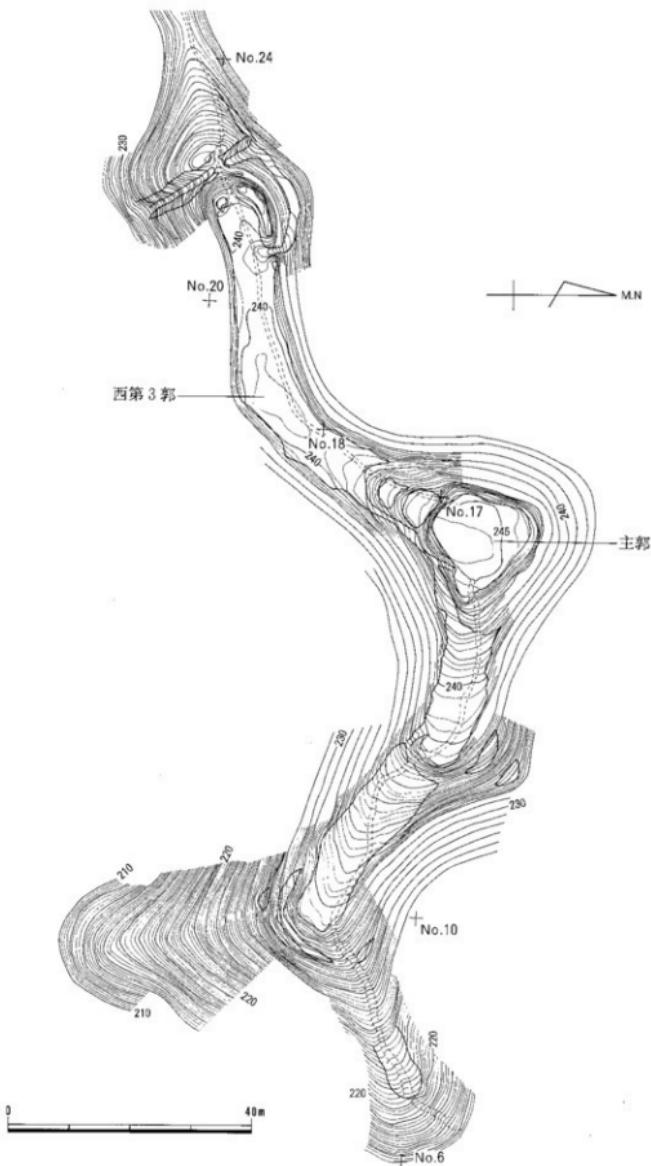


図 6 調査前地形図

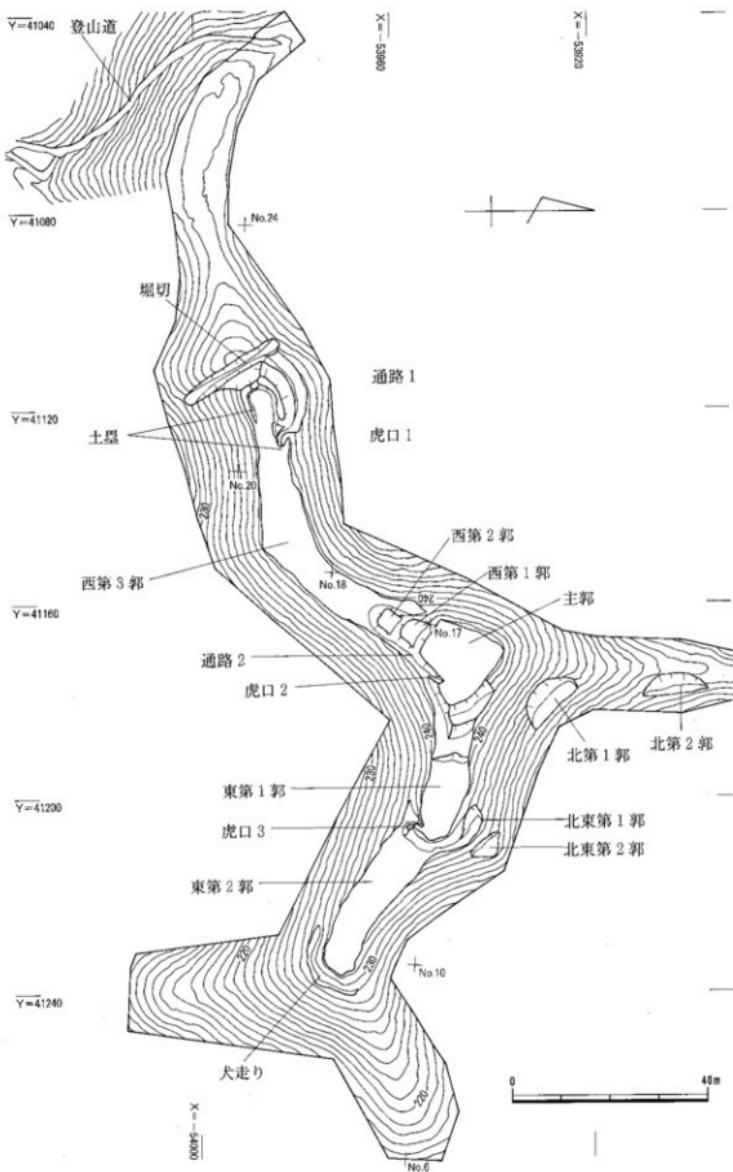


図7 岩井城跡全体図

第2節 遺構

1. 西第3郭先端

岩井城の各曲輪が面する南北の斜面はいずれも急峻でこれを這い上がるには容易ではない。また、岩井城東端の東第2郭先端は深い谷に面しており天然の堀切をなしている。これに対して西第3郭から掘切を挟んで西側へはなだらかな尾根筋がのびており、この尾根筋をたどれば最も容易に岩井城へ侵入できる地形条件にある。そこで西第3郭の先端部は、堀切によって尾根筋を遮断し、さらに土塁・通路1・虎口1を設け、岩井城の中では最も強固な防衛施設を構築している。また土塁内部には集石1が存在する。

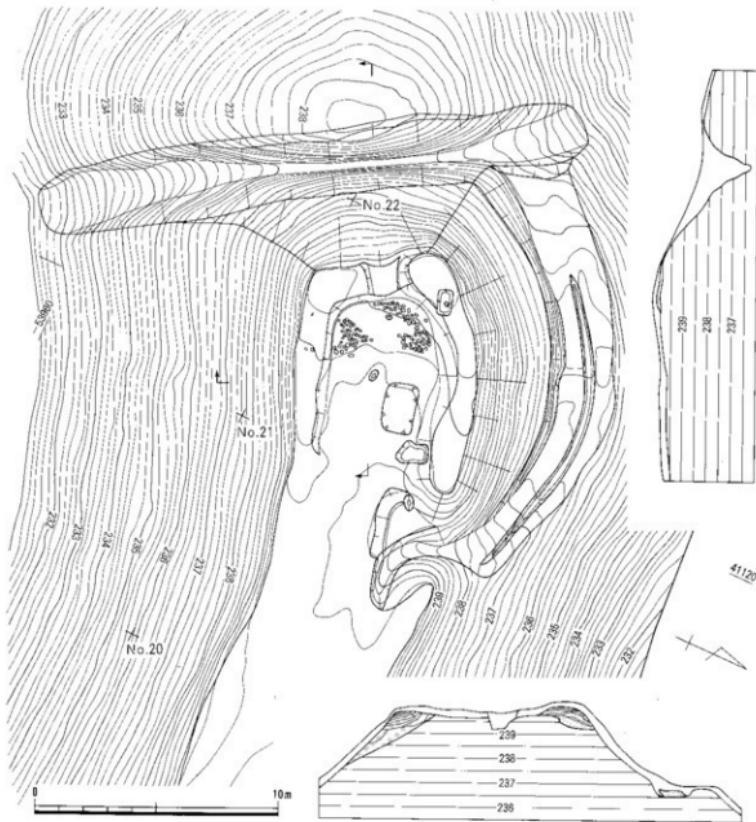


図8 堀切・土塁周辺

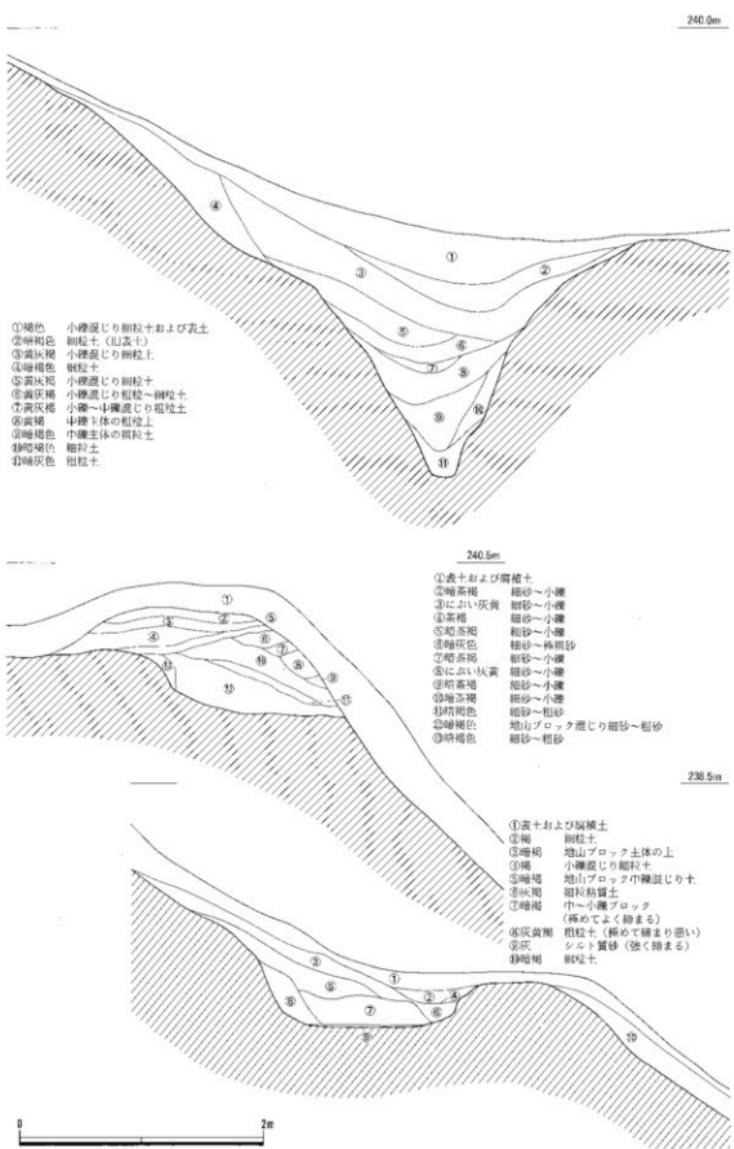


図9 堀切・土壌断面図

堀切（図8・9）

断面「V」字形を呈し、底部幅は最も狭いところで0.2m、土壠端と対面側との水平距離にもとづく上部幅は4.1mを測る。堀切の南北延長は約22mあり、南斜面側が長く底部の比高差で約5m下方まで続くが、北斜面側は2m余り下方にのびるに過ぎない。底部幅、深さは尾根筋上を断ち切った付近が最も狭く深く、これから外れて斜面を下りるにしたがって幅広く浅くなる。断面図を示した地点での堀切の深さは土壠側で比高差3.8m、土壠対面側で比高差1.9mを測る。尾根筋の地形変換点をうまく利用した位置に堀切が設けられてために、堀切を挟んで対峙した場合2m近く高い位置から敵を見下すことができるところになる。堀切底部の幅は極めて狭く、急斜面をなすことから堀切内での動作はかなり不自由なものとなり、土壠側へよじ登ることは困難である。なお、土壠対面側への盛土は確認できなかった。

土壠（図8・9）

西第3郭の端をとりまくように南、西、北の3面に土壠が巡っている。各面の延長は南面約6m、西面約4m、北面は約15mに及ぶ。北面では虎口部分で一度途切れる。西面中央はごく最近まで登山道として往来があったことから窪みを生じているが、本来は連続していたものであろう。土壠の幅は上面で約1mあり、高さは曲輪平坦面との比高差で40cm足らずである。現状では極めて低いが、堀切の埋土が土壠に由来しているのであれば本来はかなり高さがあったと考えられよう。土壠の盛土の状況は北面の横断面でよく観察することができる。地山を段階状に掘削し、まず一段下がった部分が曲輪平坦面側よりも高くなるまで土を盛る。その後は水平を確保するように築成状に積み上げている。

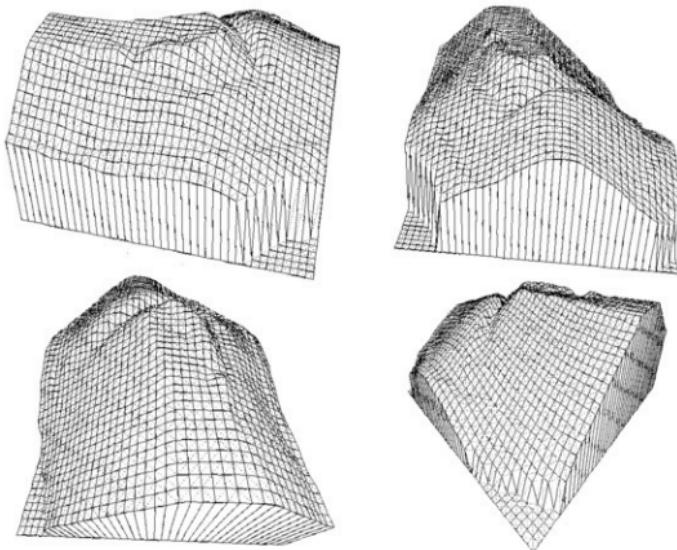


図10 土壠・堀切周辺鳥瞰図

通路1（図8・9）

堀切北端部から北斜面側に幅約2mの通路状平坦面が緩やかな弧を描き横矢掛かり状をなす。やや狭くなるとともに急に高度をあげて右へ折れ曲がり虎口に至る。平坦面と北辺の土塁側斜面がなす角度は45°に近くかなり急峻である。また、単に削平して平坦部を造成しているだけではなく、板塀状施設を両面に設け通路幅を1m弱と極めて狭くしていると推定される。断面観察によれば、まず土塁斜面側に沿って平坦部を幅約1m深さ約0.2mの溝状に掘り下げている。これを埋め立てた過程で土塁斜面側に何かを斜めに立て並べたらしく、この部分の堆積土（図9最下段-⑧）はまったく締まりがない。さらにその対面には埋め立て後に小さな溝が掘られている。これらに挟まれた実際に通路として使用されたであろう幅約1mほどの部分の土は極めて堅くしまっていた。

通路はこの溝が途切れのところで右へ折れ曲がるが、丁度その真正面には虎口東側の土塁が位置し、ここに立てば通路から侵入しようとする敵と対峙し、その側面を狙うことができる。

以上のように通路1へは堀切から簡単に侵入できるが、これを通じ城内への侵入を阻むために巧妙な構造となっていると推定される。

集石1（図11）

西第3郭西端の土塁内側には拳大から20cm前後の角礫を集積した箇所がある。礫は南、北、西の各面に3つのブロックに分かれて分布し、3ブロックともほぼ同量であるが、意図的な配列をうかがうことはできない。西面のやや大型の礫を除いて大半の礫は地山から浮いた状態で検出されており、本来の位置からは遊離していると推定される。同様な集石は主郭でも検出されているが、いずれもその機能を推定する情報に乏しい。

虎口1（図12）

西第3郭の堀から南へ直角に折れ曲がった通路は、東西を土塁に挟まれ幅50cm程の溝状をなし、土塁内側でさらに東へ折れ曲がる。土塁内の曲輪平坦面はこれに向かってなだらかに傾斜し、低い段をもって「匁」形に溝状となった通路に接する。周辺には虎口の守りを固める杭列や柵列となるような遺構は認められない。

なお、これらの遺構の調査終了後、土塁の盛土をすべて除去したが、土塁下にはなんら遺構は認められなかった。

2. 西郭

西郭は、主郭から階段状に連なる小規模な西第1郭、西第2郭と最も広い面積を有する西第3郭より構成される。

西第3郭（図14）

幅約7～10m、延長約40m、面積約350m²の長大な曲輪で、中央付近で折れ曲がり「く」字状をなす。西第2郭から虎口1までは緩やかに高度を下げ約1mの比高差があるが、虎口1付近から最先端の土塁にかけては逆に約60cm（土塁頂部では80cm）ほど高くなる。曲輪の造成は尾根部を平坦に掘削した土を



図11 集石 1

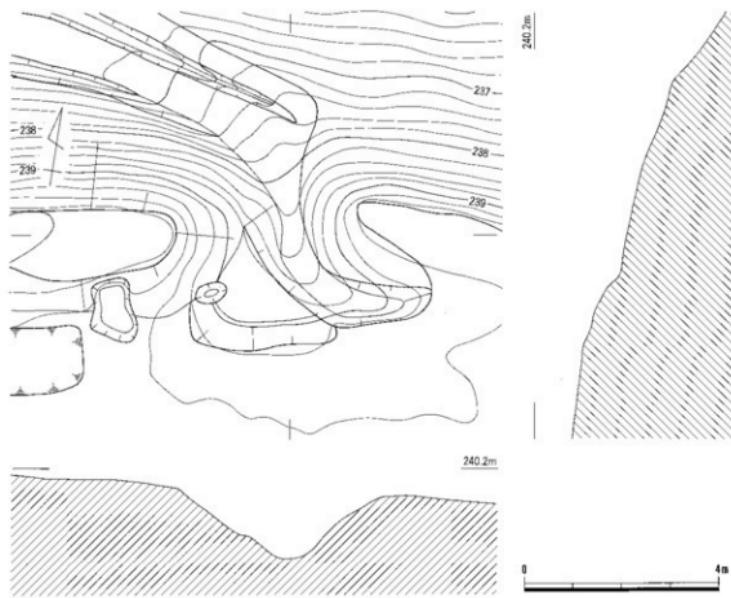


図12 虎口1

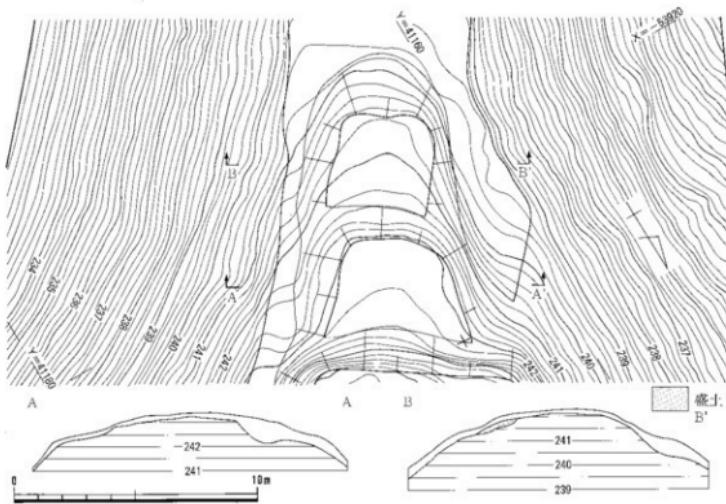


図13 西第1郭・西第2郭

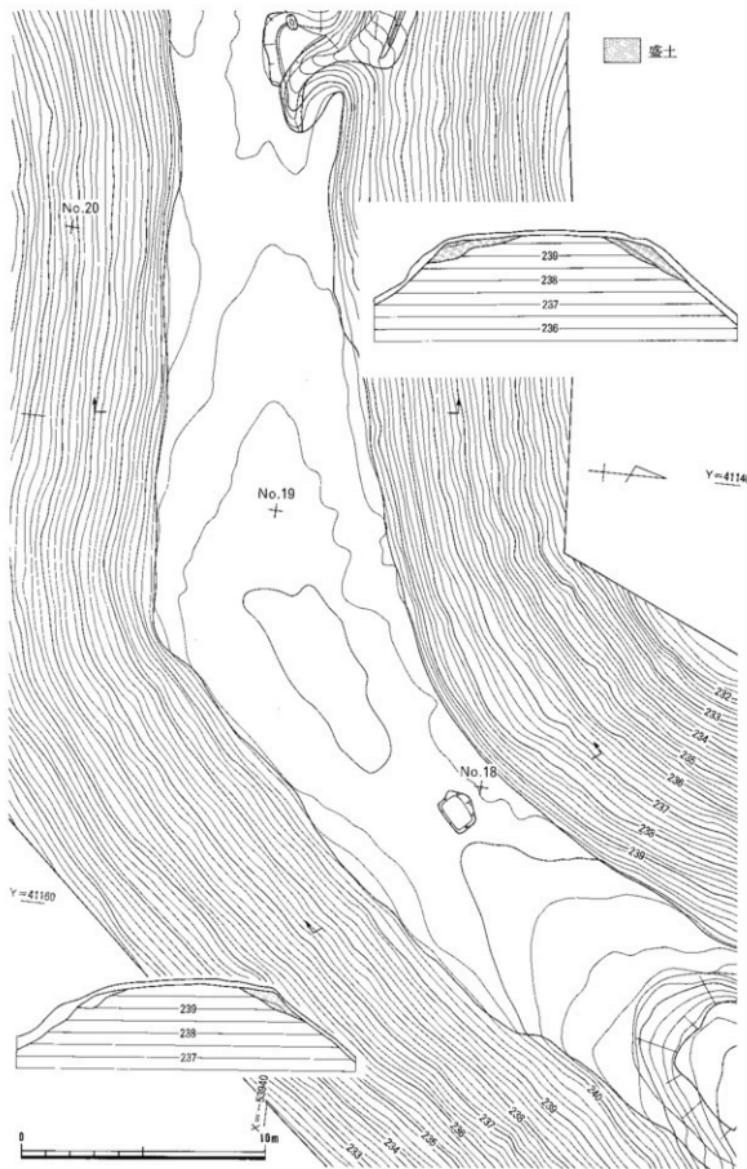


図14 西第3郭

両側に盛土することで、曲輪平坦面を広げている。これによって切土のみの平坦面を2倍の広さにしている場所も認められる。

西第1郭・西第2郭（図13）

両曲輪とも幅約5m、延長約5m、面積約25m²の小規模な曲輪である。主郭と西第1郭の比高差は約2m、西第1郭と西第2郭の比高差は約80cm、西第2郭と西第3郭の比高差は約1mであり、それぞれ侵入を阻むほど圧倒的な比高差ではない。むしろ西第1郭・西第2郭を介することで、主郭への到達が容易となるようにも思われる。

3. 主郭

岩井城の中核をなし、曲輪内に集石2が存在する。西郭と東郭をつなぐ通路2が曲輪の東南裾を走り、これから虎口2が取付く。

主郭（図15）

「八」の字に展開する曲輪群のほぼ中心部分に位置し、標高245mの最高所の位置を占めることから、主郭を中心として東西の曲輪が両側に展開し、曲輪群の要の位置を占める状態となる。

基本的な平面形は合台形を呈し、その上底を西曲輪の基軸方向に揃え、下底の南コーナーは東曲輪へと連続し、北コーナーは北方曲輪の存在する北尾根の方向を取っている。各辺とも切岸を行なうことにより、可能なかぎり直線的に作り出されている。

主郭平面形の計画的なプラン（図16）は、曲輪を南北に横切る18m（60尺）の対角線を基軸として決定されていることが伺える。まず基軸を地形に則して設けるが、基軸の北端付近の地形は北尾根に向けて急激に下るため、版築を伴う大規模な切岸を行なうことによって18mの延長を確保している。この基軸が設けられたところでその延長を4分割し、両端から9m（30尺）の中央分割点より直角に振り分け、東側に9.6m（32尺）を、西側には4.8m（16尺）の距離を確保する。その東西両側への距離の比率は2:1となる。北側4分の1の分割点でも同様に東に5.7m（19尺）、西に3.9m（13尺）を振り分ける。ここでは3:2を比率とする。残る南側の分割点では東西にそれぞれ6m（20尺）を取り、南端とを結ぶ二等辺三角形を形成する。

こうして基軸の各分割点から直角に振り分けられた各基線の先端を結ぶことによって、菱台形の曲輪平面プランが決定されている。さらに、南4分の1分割線の東端から1.5m（5尺）と中央分割線の東端から3m（10尺）の長さの辺を、4.5m（15尺）の直線によって結ぶことにより、虎口が取りつく突出部が造り出されている。この突出部は、主郭曲輪の主要部分に比べると極わずかに低くなり、登口に向かって緩やかに傾斜するため、主郭曲輪を形成する要素のひとつとして区分されていた可能性が高い。

主郭の南側部分では地山が露頭して造構面となっているが、他の三方は切岸による造成を行なっている盛土が流出しているため、前記の地山露頭部分に比べると約30cmあまり低くなっている。曲輪内には数個の柱穴が掘込まれているが、建物址等になる可能性はまったくみられないため、その柱穴の性格については明確に把握できない。

東・西・北の各尾根および虎口の位置する南の4方向については、切岸の状態を確認するために、トレンチによる最終的な断面調査（図18・19）を行った結果、特に北西と北東の2辺は比較的大がかりな

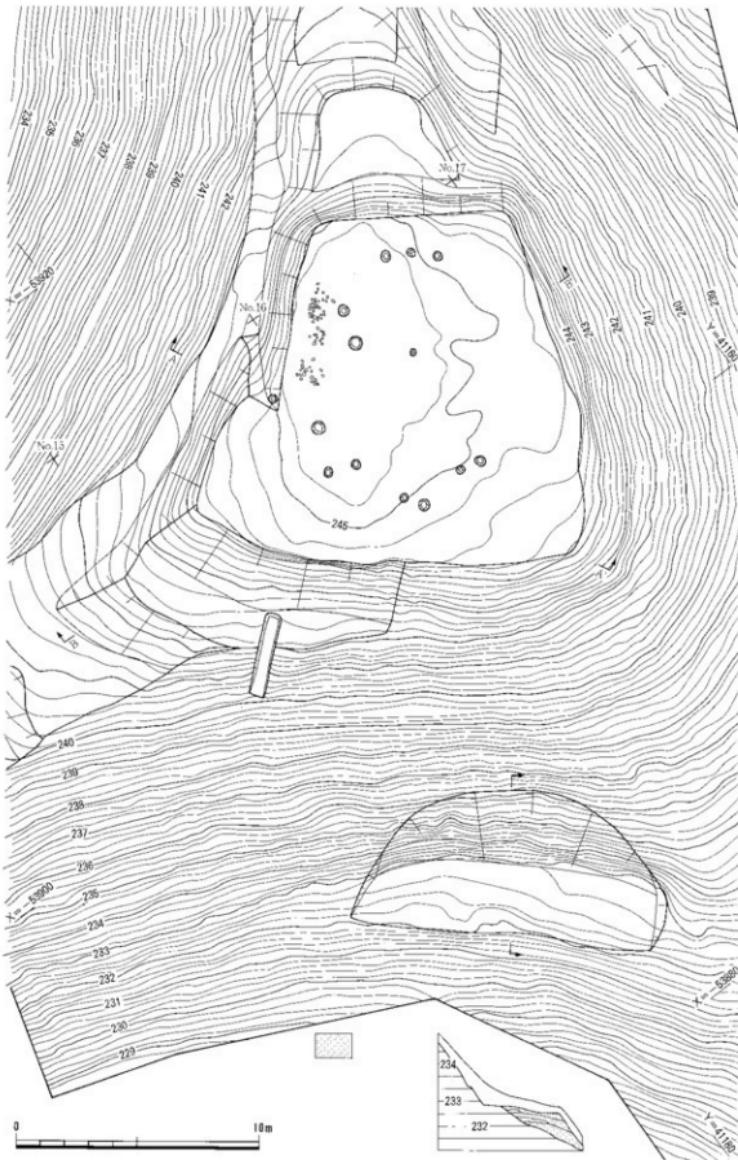


図15 主郭・北第1郭

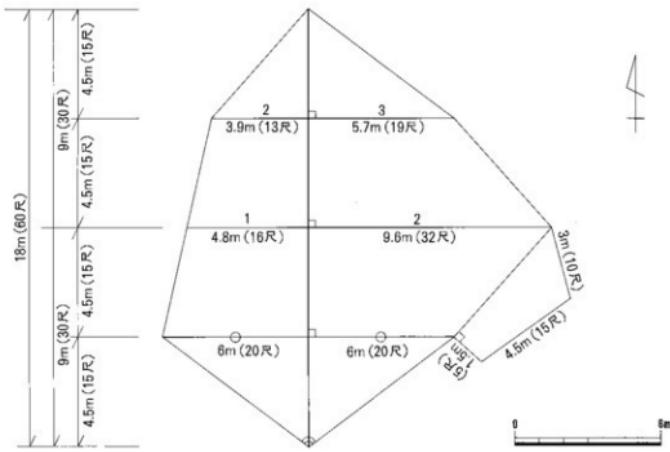


図16 主郭繩張り復元図



図17 主郭盛土除去後

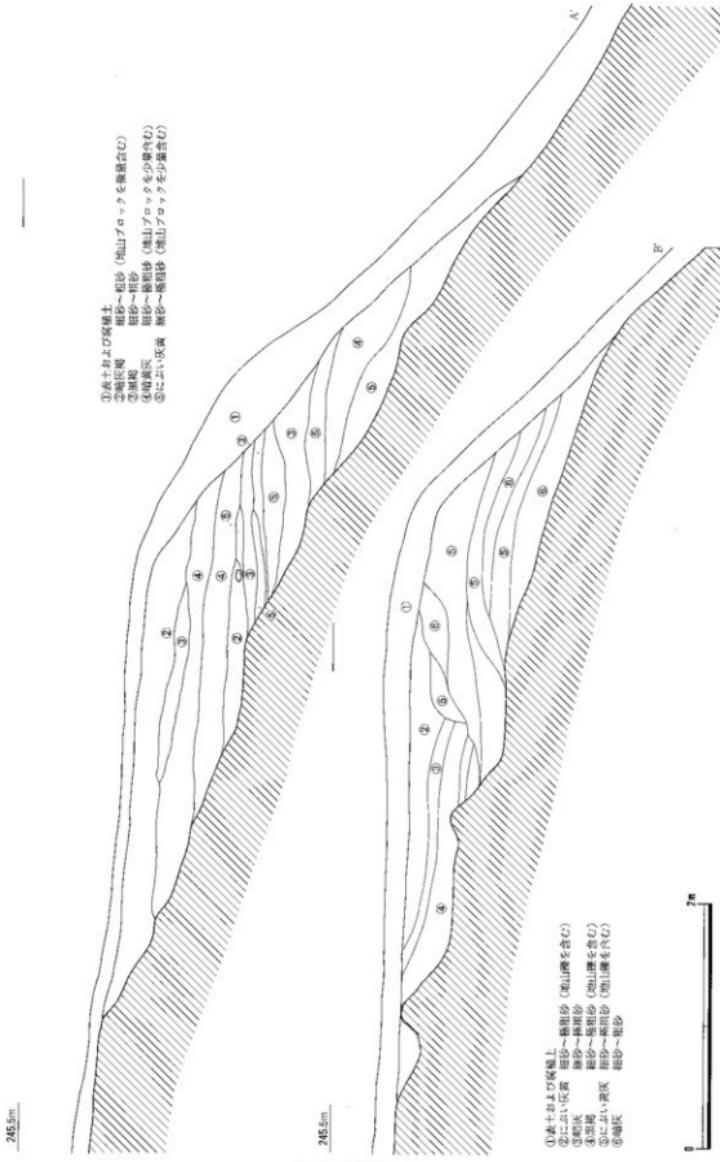


図18 主郭断面図

切岸によって広い平坦面を確保していることが判明した。主郭平坦部の形成に際して、まず自然地形の尾根最頂部を削平すると併に、その直下の斜面に数段の幅約50cmの足場掛かりと思われる平坦部を造り出した後、その平坦部に乗せ掛けるようにして丁寧に版築造成している(第21図)。他の曲輪は切岸による造成の規模が小さいためか、その断面を観察しても顕著な版築、足場掛け等は確認できなかったが、

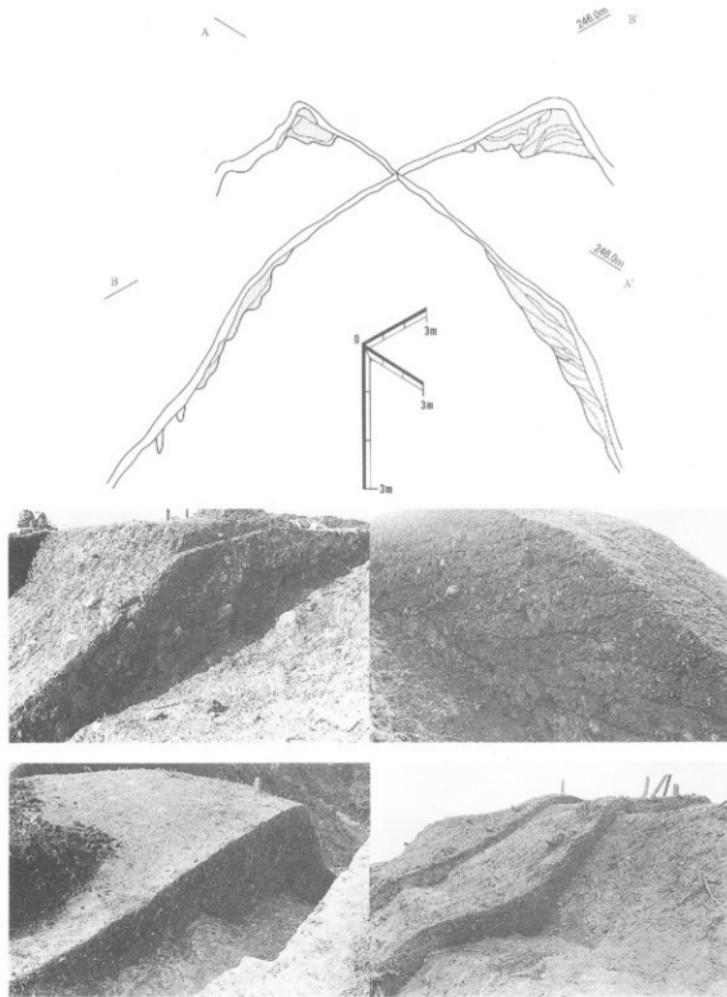


図19 主郭土層断面パネルダイアグラムと断ち割り状況

主郭においては基本的に灰黄色の地山土と黒褐色の黒ボク様の土を交互に版築するといった入念な積み重ねによって、かなり堅固な地行を行っている（図19）。こうした切岸による直線的な曲輪の形成により、地山削平に比較して3倍近い、平坦面を確保している。

集石2（図20）

現状の曲輪の周囲には土塁を見て取ることはできないが、通路からの登口の部分にのみ幅1m強、高



図20 通路と虎口2（左）・集石2（右）

さ約20cmの低い土壘状の高まりが約5mの長さにわたって認められる。この土壘状高まりの表面には、周辺で集められたと思われる拳から20cm前後の角礫が葺かれたように遺存している。その検出状況は大きく3ブロックに分かれしており、特にその東端のものは一辺1mあまりの方形平面形となるが、それに伴うその他の遺構・遺物がまったく確認されないため、墓地としての可能性はほとんどないものと思われる。またこの角礫が本来の表面を覆っているとすれば、現状でその高さを残していることとなるため、上壘としてもほとんど高さをもたないこととなる。さらに、曲輪の縁辺から50cm程内側に盛られていることなどから考えて、土壘と考えることは困難かと思われる。

通路と虎口2（図20）

主郭から1m弱下がった南東辺の裾には、主郭を迂回して東第1郭と西第3郭を結ぶ幅約90cmの通路が通る。その通路からは西曲輪の方向から主郭に続く登口が斜めに掛かり、主郭の舛型様突出部を取りついで、主郭への唯一の虎口となっている。この通路も自然地形に逆らわず、西第3郭から主郭に向けて次第に高度を高め、その後徐々に下って東第1郭に取り付いている。その通路がもっとも高度を高めた箇所から主郭虎口への登口が分岐する状態となる。さらに主郭の南東辺斜面は、幅約2.5m、長さ約8mの小規模な帯状曲輪をもった後、東第1郭へと移行する。この帯状曲輪と主郭との間には約70cmの急峻な段差があり、東第1郭へは比高差約50cmの緩やかな斜面となっている。

曲輪平坦部と北側の斜面埋土上より、15世紀後半に属する土師器皿類を中心とする少数の土器が出上している。

4. 北郭および北尾根

北郭は、それぞれに独立した小曲輪である北第1郭・北第2郭より構成される。

北第1郭（図15）

主郭から北に下り、なだらかな北尾根が派生する分岐部の東斜面を約5m程回り込んだ位置にあり、ちょうど主郭から連続する著しく急峻な斜面の途中に、北東方向をむいて構築されている。平坦面の海拔233m弱、主郭との比高は約10mを計る。

山側の斜面を半月型に大きく削り込み、その土を前面に盛り上げることによって、4×12mの長方形の平面を呈する曲輪を作りあげている。これに伴う山側の削り込みの高さは約3m、前面の上盛の高さは1m強に及んでいる。西方以外の3方は急峻な斜面となっているため、他の曲輪との連絡道は見当らない。必然的にこの曲輪への入り口は、主郭の北斜面を下り、北尾根に取り付いた後斜面を等高線に沿って横に移動してたどりついたものと思われる。

曲輪平坦面の直上、それを覆う埋土および曲輪の前方表土内からは、15世紀後半代と思われる土師器皿類の細片が少數出土するとともに、平坦面に炭・灰・焼土などが広範囲に散乱しているため、曲輪内で火が頻繁に使用されたことが知れる。北東以外の3方を尾根によって囲まれ、強い西風の遮ることができるため、こうした火を使用する機能を負っていたものと考えられる。

北第2郭（図22）

北第1郭の北方約25mにあり、北尾根の稜線から東斜面を3mあまり下がったところに築かれている。

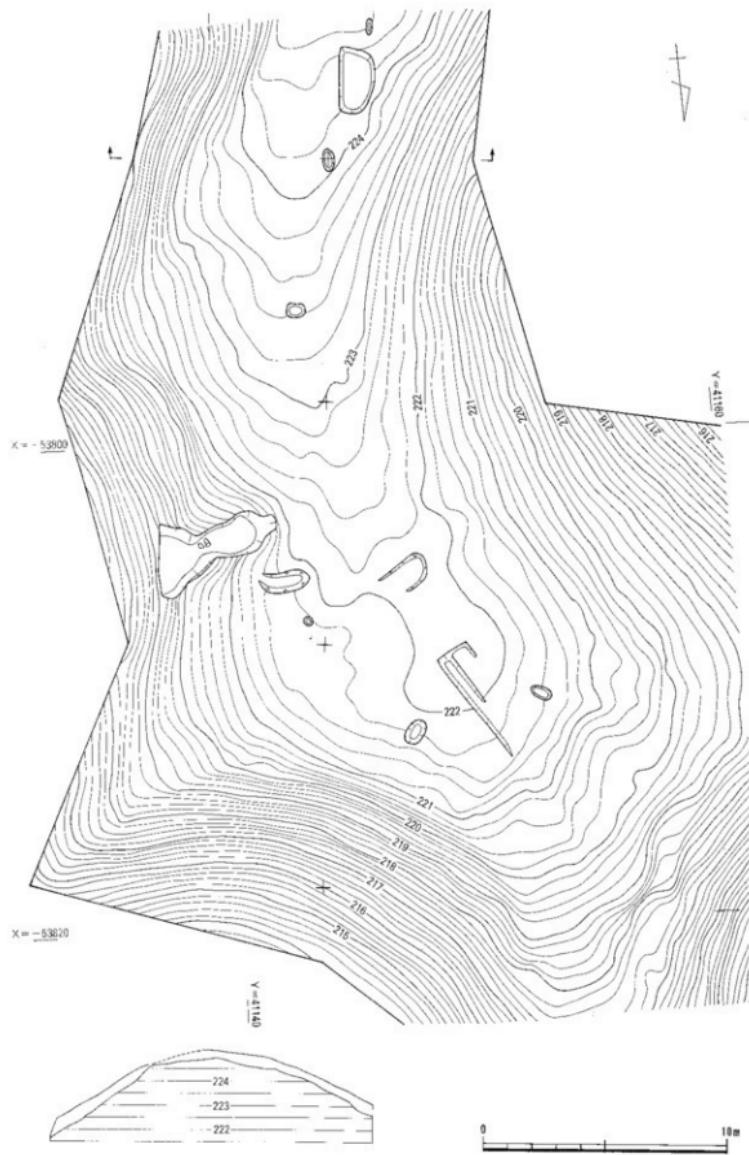


図21 北尾根

平坦面は最大幅約2.5m、延長約13mの細長い半月型を呈している。北第1郭同様斜面に設けられているが、北第1郭に比較するとその傾斜はやや緩やかなため山側の三日月状の削り込みの高さも2mで、削平面の傾斜も緩やかである。第1郭同様削平した土を50cm程の高さまで前面に押し出し、曲輪面を造成している。

曲輪面で海拔225mを計る。

曲輪埋土およびその周囲からも、遺物はまったく出土していない。

北尾根

北第1郭から同第2郭が存在する付近までの北尾根の稜線は、なだらかながらも非常に狭く幅は1m足らずであるが、その後先端に向かって広がり、先端部では10mほどとなる。ここまで平坦な稜線上には性格不明の土壤が2・3あるものの、城跡との関係を直接示す遺構はもとより、その他の時代の遺構もまったく確認することができない。時代は新しくなるものの、唯一明確な遺構として東斜面に炭窯（後項にて詳細に説明）を1基検出した。遺物はまったく出土していないが、遺構の構造および残存状況から判断して太平洋戦争前後に属するものではないかと思われる。

平坦となって伸びた尾根はここで大きく下り、さらに北進するが以北には遺構を確認することはできなかった（確認調査の項で明記したとおり）。また先端部から西に分岐する小さな尾根の中程に、平面形が馬蹄形を呈するかなり広い平坦地があり、当初曲輪のひとつと判断して調査範囲を拡大したものの、調査の結果、ある時期に地滑りによって形成された自然の平坦地であることが判明した。

よって、北尾根地区の調査においては、遺物はまったく出土しなかった。

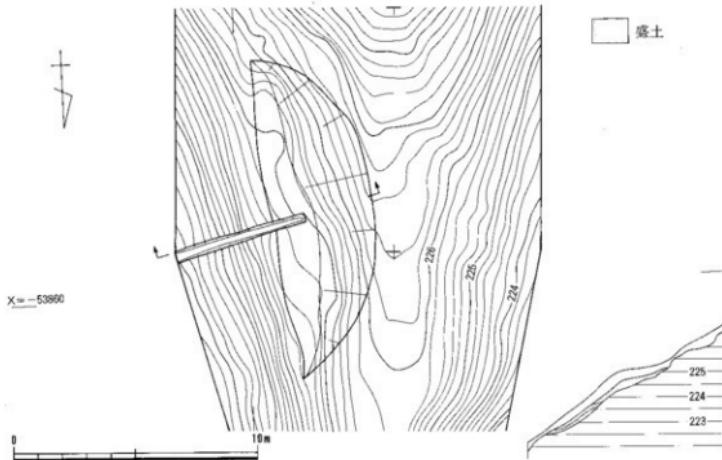


図22 北第2郭

5. 東郭

東郭は広い平坦面を有する東第1郭・第2郭と、手狭な北東第1郭・北東第2郭、および犬走りより構成され、東第1郭と第2郭は虎口3で結ばれている。

東第1郭（図24）

東第1郭は主郭の東にあり、自然地形の山の尾根筋を利用してわずかに中ほどで折れ曲がる、逆「く」の字型となっている。曲輪の幅は主郭とのつけ根部分では8mあり、やや南へと曲がる部分では8.5m。

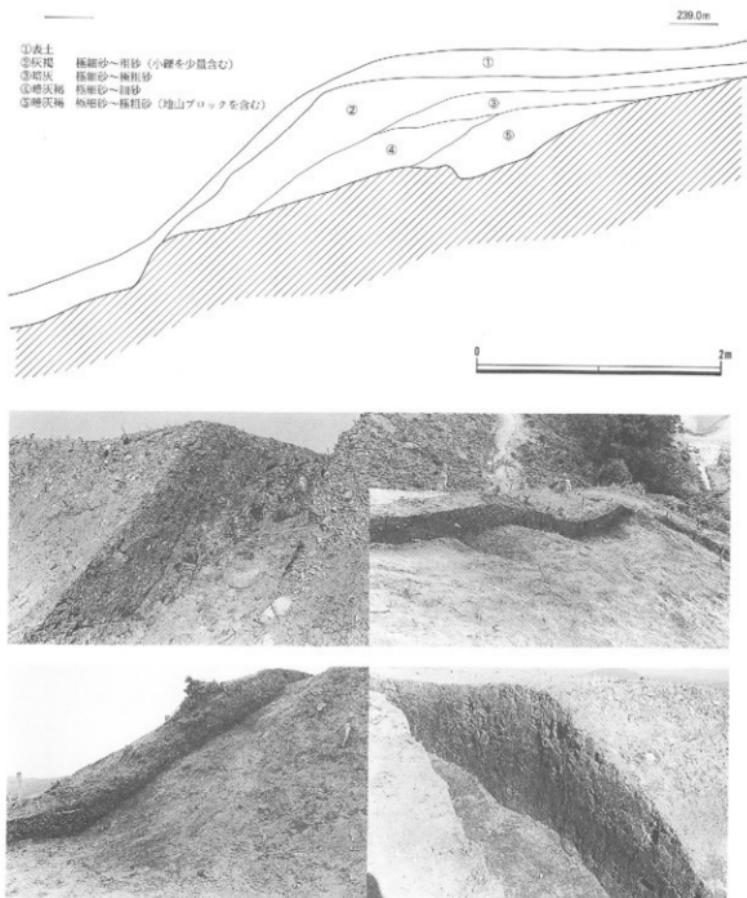


図23 東第1郭東断面図と断ち割り状況



図24 東第1郭

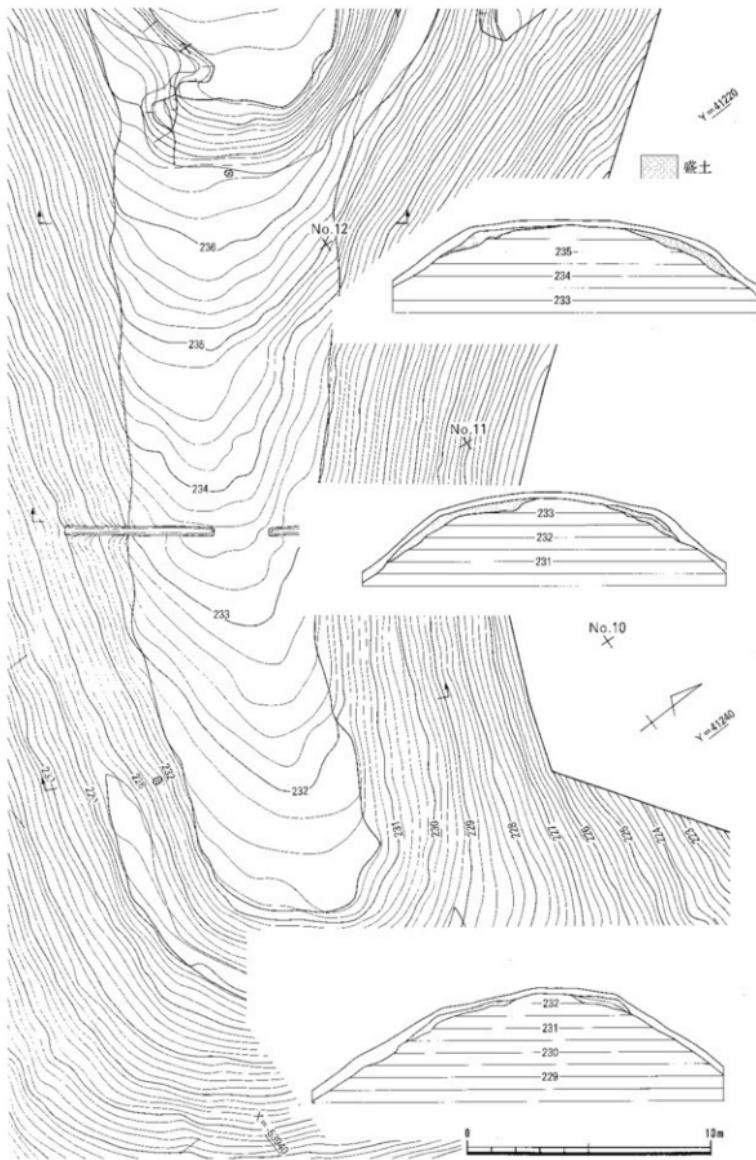


図25 東第2郭

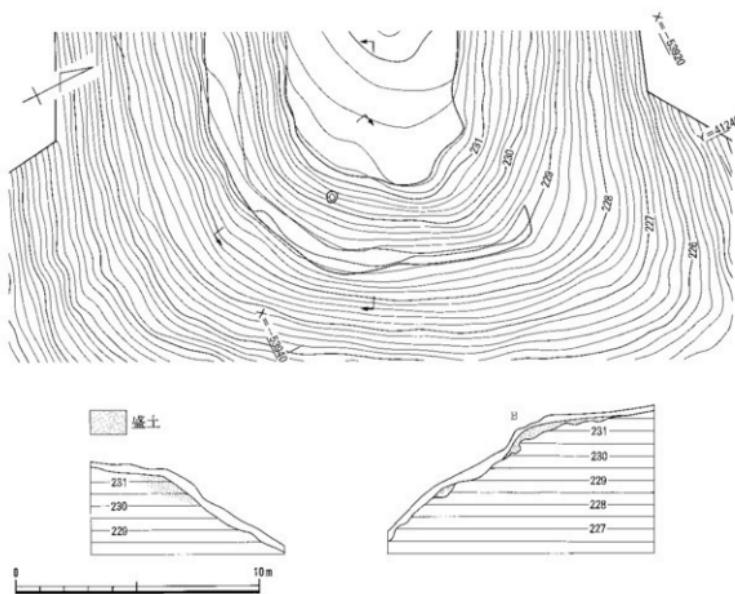


図26 犬走り

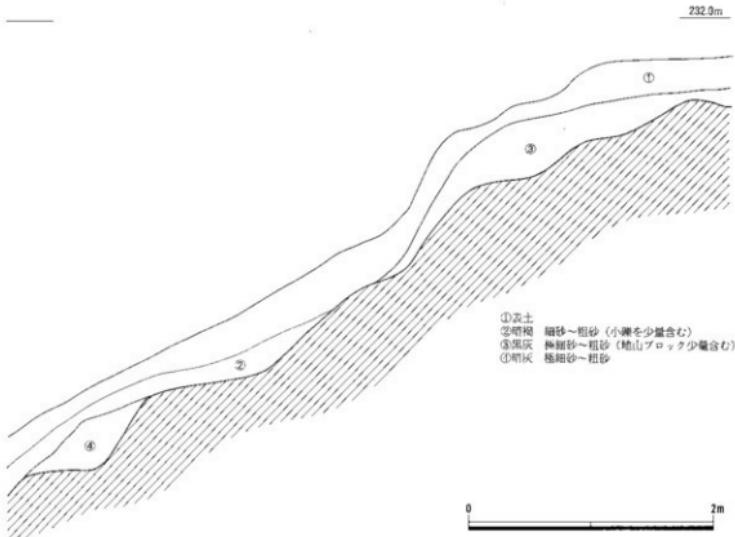


図27 東第2郭・犬走り断面図

東2郭に面する先端部分は4mで、東2郭に対して正面を向くように向きを南に変えてある。曲輪の長さは25m、面積は約187m²、曲輪内の標高差は6.4mを測る。曲輪の周囲に土壁等はない。

曲輪が曲がる部分からややずれた西には不明瞭な50cmほどの段差があり、またこの段差より西の部分については曲輪内の傾斜が急である。段差より東の部分については郭内の傾斜が緩やかで、東端部にはかなりの量の盛土がなされている。東南端に「折り返し」の虎口3を設けている。

北東第1郭（図24）

東第1郭の北東端の下にあり、東第1郭との比高差は3mを測る。幅1m長さ8mのはぼまっすぐな通路によって東第2郭とつながっている。つけ根部分の長さ6.5m、先端部の長さは5m、幅1.5mの台形ではぼ直線的な構造を見ることができる。

北東第2郭（図24）

北東第1郭の北東下方にあり、北東第1郭との比高差は2.5mを測る。つけ根部分の長さ7m、他2辺は4mの2等辺三角形で先端部分は雨などにより流され少し傾斜ができたものと思われる。北東第1郭と同様に直線的な構造である。

東第2郭（図25）

東第2郭は東第1郭の東にあり、長さ約26m、面積は約253m²ある。郭内の標高差は6.2mを測る。「く」の字型に折れ曲がっており、つけ根部分の幅9.5m、折れ曲がった部分の幅7.5m、先端部の幅7.5m、長さ13.5mの長方形に近い台形の先に長さ（高さ）9.2mの平行四辺形をつなげ、その先に半円形の先端部を付けたような形になっており、先端部をのぞいては直線によるプランを見ることができる。東第1郭の橋から先端部にかけて緩やかに傾斜しており、先端部の方が傾斜は緩やかであるが、全体として自然地形の山の尾根筋をそのまま利用しており、削平はそれほどなされていない。断面形は蒲鉾形であるが、両肩については雨などにより盛土が流されたものと思われる。曲輪の周囲に土壁等の遺構は確認されなかった。

人走り（図26）

東第2郭の南東端から2m下がった所に人走りが廻っている。東から南の面にかけて長さ20mを測る。曲輪の幅は均一ではなく、南西側斜面では幅1.5mあるが南の尾根筋では幅1m弱になり東斜面では、幅0.5mほどのせまいものとなっている。曲輪は自然地形をそのまま利用し東第2郭の南東端を弧をえがいて廻っており、直線のプランは見られない。

帯曲輪から南方向に延びる尾根筋には他の曲輪はみられず自然斜面が続いている。また東の尾根に開しても同様な状況であるが、こちらの尾根筋は比較的緩やかであるにもかかわらず、堀切等の城域を限る施設は全く整備されていない。

虎口3(図28)

東第1郭の西南端にあり、東第2郭からつながる幅1mぐらいの通路は2mほど進んだ所で幅が広がり、5m、9m、9mの三角形の空間となる。ここからお椀の底のようなはっきりとしない通路は緩やかに右方向へ折り返して東第1郭に至っている。この通路の北西側斜面の部分については流土と盛土の判別が困難であったため、掘り誤っているかもしれない。

東第1郭の南東端を虎口に対して小さく突出させることで横矢掛りをきかせている。虎口3は西第3郭の虎口1や主郭の虎口2類似した構造であり、これらと同時期に造られたものと考えらよう。

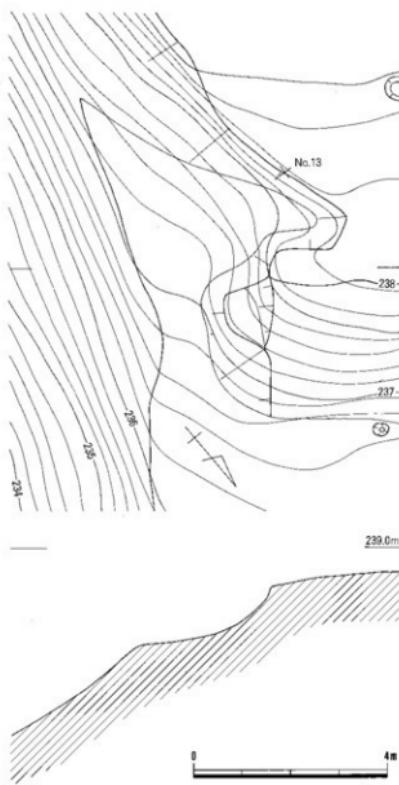


図28 虎口3

第3節 遺 物

今回の調査により出土した遺物は非常に少なく、土器8点・石器1点・鉄器4点である。このうち、土器と鉄器の1点づつは古墳に関連したものであるため、城跡に伴う遺物は土器7点、金属器6点である。

1. 土 器 (図29)

今回の調査では、7点の土器が出土している。城跡に伴う時期と考えられるものであるが、出土地点は主郭とその北斜面に限られる。特に北第1郭からは図示できなかったが、多数の土師器皿類の細片が出土している。

城跡に伴う土器（2～8）：2～4は土師器の小皿である。全形を知り得るものは3のみであるが、いずれも口径は9cm前後であり、器高は3で1.8cmを計る。3は小さな平底から明確な境をもたないで、内窓気味に口縁部が大きく開き、端部は丸く納まる。2は口縁部のみであり、端部は内面が小さく窪んだ後丸く納まる。4も口縁部のみであり、端部外面が短く立ち上がった後丸く納まる。2・4は主郭北部の盛土内より、3は主郭からわずかに下った斜面の表土内より出土している。5～7は口径12cm前後の土師器の中皿である。器高は2cm弱であるが、全体が知れるのは5のみである。5は若干あげ底気味の底部から明確な境をなした後、口縁部が直線的に大きく聞く。端部はかなり広い水平面をなして納まる。6・7の口縁部は底部との境が丸味をもち、極わずかに内窓しながら聞く。いずれも口縁端部は丸く納まる。6・7は主郭北部の盛土内より、5は主郭北側の斜面中腹の表土より出土している。8は白磁碗の底部である。底径5.4cm、現高1.5cmを残す。高台断面は逆台形を呈し、水平接地する。白釉の塗布されるのは内面が身込み部分まで、外面は高台境の範囲である。また、内面には砂目が観察できる。主郭北側直下の斜面表土内より出土。

2. 金属器 (図30・図版31)

金属器は鉄製品が3点、銅製品（銅錢）が3点出土している。

1は鉄釘で先端部を欠く。断面四角形で頭部は潰れている。2は筒状の鉄製品で上端は内側へ折れ曲がり、下部は突出部がめぐる。3は内面に小突起がめぐる鉄製品の断片で容器の一部と思われる。

銅錢は、「皇宋元寶」の破片と考えられるもの、「寛永通寶」、判読不明の各1点である(図版31-5～7)。

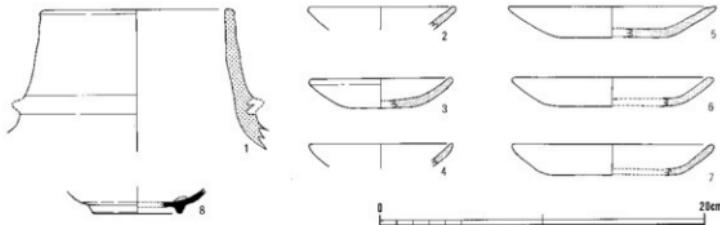


図29 出土遺物 (1)

3. 石器(図30)

砾石が1点出土している。断面五角形を呈しすべての面が使用されている。特に表面の一面は使い込まれて大きく湾曲する。凝灰岩製。

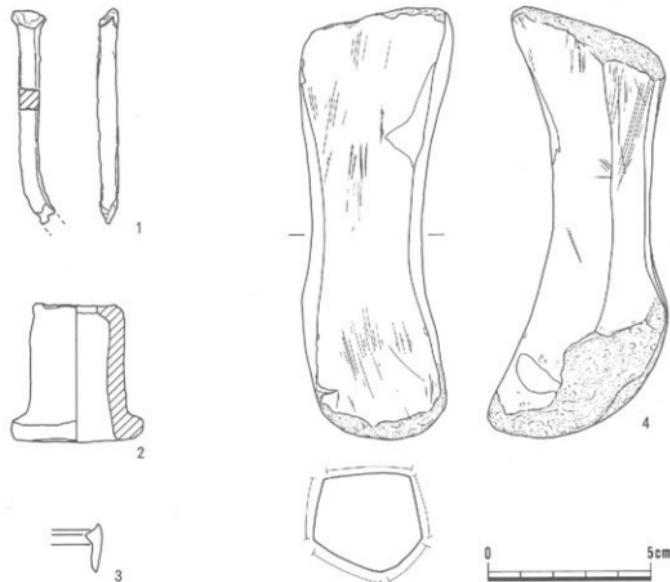


図30 出土遺物(2)



主郭と虎口部を望む

第IV章 岩井城下層古墳と炭窯の調査

第1節 岩井城下層古墳

土層を観察するために主郭を断割りしたところ、盛土の下層、地山上面より切り込む古墳の主体部掘方の南側辺を検出した。このため、主部の盛土の土層状況の調査を終了した後盛土をすべて取り除き、一辺約15mの三角形平面の範囲で地山面まで掘り下げ、下層に存在する古墳の調査を行った。

1. 墳丘と主体部（図17・31）

古墳に伴う盛土と埴丘（墳形）は、主郭造成の際の大規模な切岸および足場掛けの構築によって完全に破壊されており、本来の状態はまったく止めていない。よって主体部自体も本末はもっと深かったものと思われるが、現状では25cm程度しか残存していない。埴丘を想定すると、直径10~12mの円墳もしくは12×8mの長方形墳であったと思われる。いずれの墳形を想定しても、主体部は埴丘の北側に大きく偏る。さらに、主郭構築の際の盛土の状況からみて南側には盛土が一切なく、むしろ切土により地山面が露頭していたため、本来の自然地形は南側に山頂のピークがあったものと思われる。よってこの部分に存在していた別の主体部が、後世の主郭構築の際に削平され消失したことと考えられる。

木棺直葬主体部の平面形は延長約3.5m、幅約1mの隅円長方形を呈し、ほぼ東西の方向に設定されている。ただし、岩盤の地山を掘り込んでいるため、その掘削ラインはかなり波打っている。側壁はわずかに開くもののほとんど垂直に立ち上がり、壇底は平坦で側壁との境は明確に直角をなしている。木棺は掘方の中央に置かれており、その底は浮くことなく掘方の壇底にはほとんど接している。木棺の延長は約2.3m、幅は約60cm、深さは現高で約23cmを計るが、掘方を検出した段階でその平面プランも確認できるため、やはり主体部の上半が削平されていることが分かる。

木棺内の南東部、南側壁際で幅約3cm、現長約5cmの鉄鎌の基部の部分が1点出土したものの、主体部の内外を含めて他の遺物はまったく確認できなかった。城跡の調査の際主郭北方の調査区境で出土した5世紀前半の土師器短頸壺が、本来この古墳に副葬あるいは供獻されていた土器の可能性が高い。さらに、立地条件などを考慮しても、5世紀前半の古墳ととらえて妥当なように思われる。

2. 遺物（図29・31）

土器（図29-1）：直口の短頸壺である。頸部以下を欠損するが、口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がり、端部は極小さく外方に肥厚し、狭い平坦面をなして納まる。頸部直上の外面には、断面三角形の突帯が回されているものと思われるが、剥脱しており、その痕跡のみを止める。口径14.8cm、器高は現高で11.6cmを計る。外面とも剥離が著しく調整は不明確であるが、口縁部については内外面とも横方向のナデを施しているようである。5世紀前半に属する古式土師器である。北第1郭北東の調査区壇付近より出土している。

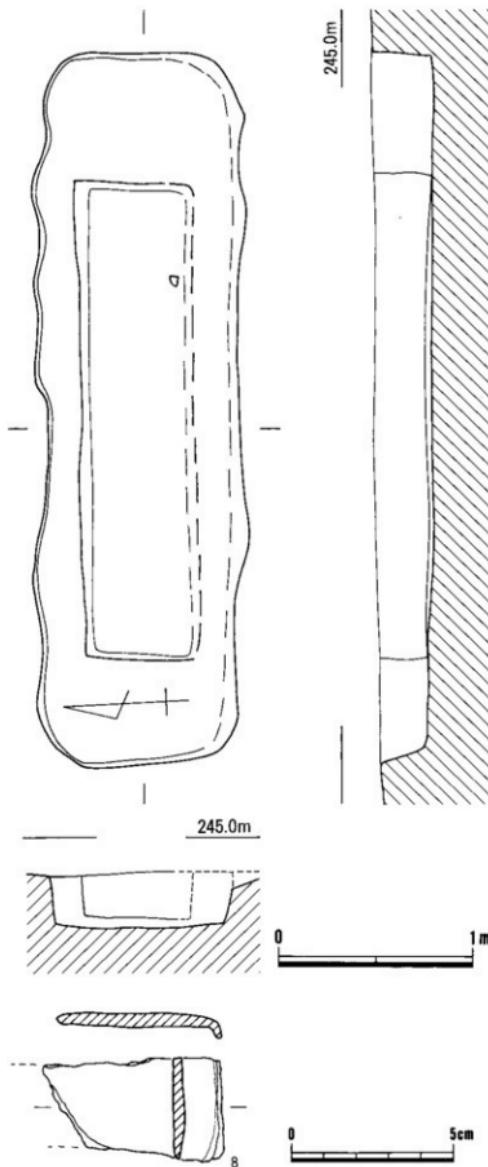


図31 岩井城下層古墳主体部と出土遺物

金属器（図31）：鉄鎌の基部である。残存長5.6cm、幅3.3cm、厚さ4mmを測り、基部から先端部にかけてやや幅狭くなっている。基部を右においていた場合、基部端は手前側に折れる。

第2節 炭窯

北尾根先端部付近の東斜面にあり、煙道を尾根筋より1mほど下がる位置に構築している。窯本体は奥行約2.5m、奥壁幅約2.2mの肩の張った無花果型平面形を呈する。床面は中央部が極わずかに窪むものの、ほぼ水平となる。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井部にむかって釣鐘状に狭まる。ただ天井部は完全に閉塞していないため、地上に粘土によってドーム型の天井部を構築していたものと想像される。煙道は奥壁の中央部に奥壁を掘込むかたちで、ほぼ垂直に設置されている。その下端は床面に接しており、床面から約10cmの高さの位置に石が据え付けられている。窯口（燃焼部）は幅約60cm、高さ約90cmを計り、床面の灰・炭屑の上にのるように閉塞基底石が残存しているので、数次の利用があったことが伺える。前庭部は床面よりわずかに高く、平面形は高さ約1.3m、長さ約2.5mの変形三角形型となる。

窯の構築されている地長面は、幅約4.8m、長さ約4.5mの半梢円形の範囲で、窯燃成部にむかうような浅い鑿鉢状に窪まされている。

燃成部・煙道部ともに壁はかなり赤化している。床は部分的に変色をきたしているが、とくに奥壁に近い部分の変色が著しい。床面には細かな炭と灰がまざった厚さ約10cmほどの炭・灰の層は依存しているが、製品はすべて運び出されており、また前庭部にもかき出した際の炭と灰の層が厚く堆積していた。



鶴峯城方面を望む

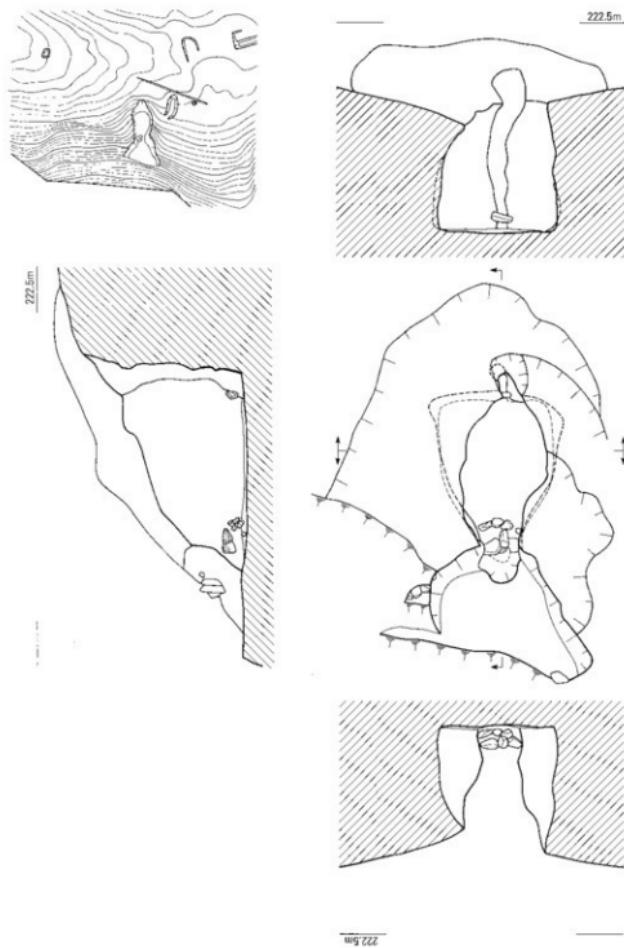


図32 炭素

第V章　まとめ

第1節　岩井城の築城過程

本節では山城の築城過程と築城（普請）工事量について考察する。

1. 築城過程

築城に際してはまず選地・縄張りが行われるが、その後に実際の工事が行われ城郭が完成する。この実際の工事には大きく分けると、①普請と②作事の2段階がある。①の普請は選地した城域の曲輪面の造成や、堀切などの防御施設の構築を行う土木作業である。曲輪の造成工事は山側斜面を削り、斜面側に盛ることによって平坦地を確保する。

②の作事は曲輪内部や周辺に諸施設を設ける作業である。但し、岩井城の諸施設については、主曲輪と西第3郭の南端にわずかな痕跡が検出できたのみである。城郭全体に全く内部施設がなかったとは断定できないが、いずれにしても軽微な構造物が設けられた程度であったことは疑いがないようである。

このため、岩井城の築城労力の大半は①の普請に費やされており、工事量の推計には普請で動かされる土量を計測することが有効な方法と考えた。

2. 土量の計算

築城に際しては前述のように普請に労力の大半が割かれている。そこで今回は普請労力を計算するために各曲輪に盛られた盛土の量を基準に計算することとした。盛土は調査時に作成した断面図をもとに、各曲輪の盛土部分の断面を平均断面として計算する平均断面法を用いた。計算手順は以下のとおりである。

①調査時に実測した断面図を基に旧表土を除いて盛土部分の断面積を計算する。

②これに断面周辺の造成部分の距離をかけて土量を計算する。

③曲輪単位に土量を合計する。

④各曲輪の面積を計算し、単位面積当たりの土量計算を行う。

ここまで計算式と各曲輪の数量は表3の通りである。但し、堀切（図34　断面1は堀切の標準断面である。）と西第1郭については土量計算をしていない。堀切部分は掘削された土が全て西第3郭の南端に盛られているためであり、西第1郭は曲輪の全体が地山を削平して形成されていると考えたからである。一方、主郭北斜面の曲輪と東第1郭北斜面については断面を提示していないが上記の方法で土量計算を行った。

以上から表3について検討すると次のことがいえる。

①単位面積当たりの土量が大きいのは主郭である。

②東郭群は調査前の地形観察では地山が大部分を占め、造成も簡略であると思われたが、単位面積あ

たりの土量では西郭群との差はなかった。

③東郭群・西郭群は両者共、尾根線の先端部分での土量が大きい。

④西第3郭では造成の重点が虎口部分と尾根先端の上堅周辺に置かれている。この部分の造成土量は曲輪全体の約20%にあたっている。さらに、西第3郭では総じて南側斜面より北側斜面に大きく造成が行われるが、これは主郭でも同様である。

⑤主郭北斜面や東第1郭北斜面の曲輪は山頂の曲輪群に比べると単位面積当たりの土量は小さい。

以上、一応の築城にあたっての傾向を分析できたが、土量計算にあたっては作業に多くの反省点も残されている。特に平均断面を根拠にしたが、岩井城では作業に際して盛土量の計算をする目的で作業が行われていない。このため、止むなくこの方法をとったが、しかし今回の検討には以下の点で問題がある。

①採用した平均断面が必ずしも曲輪全体の平均値なのかどうかという問題がある。断面を観察しなければ正確な盛土部分を割り出せないため、この問題を解決してゆくには断面の数を増やすしか方法がない。しかし、調査時間と手間を考えると多くの制約があるようにも思える。②残された断面（明らかな崩れ部分については断面形状を復原して計算している。）から計算しているため流失部分については推定するしか方法がない。以上の2点である。

一方、同様の検討としては岸本一郎氏¹⁰⁾によって兵庫県西脇市の水尾城の土量計算が既に行われている。同城の検討では、築城にあたって削った部分の土量を計算する。しかし、これについてもすでに失われた空間を復元して算出しているため誤差が生じる可能性は免れない。氏の検討は意欲的なもので、本項自信も大いにこれを参考として項を進めているが、いずれも計算方法については最善の方法が確立されているとはいいがたい。

3. 作業量の検討

様々な問題を孕んでいるものの取り合えず出された成果を前提として検討を進めたい。ここでは盛土量を作業量に換算するための検討をおこなう。

盛土の土量を作業量に換算する方法として先の水尾城の例が参考となる。水尾城では掘削・運搬・仕上げの3過程を経て作業が進められたとして、それぞれの過程について以下のような計算を行っている。まず、掘削については1.0m³につき0.69人の労働力が必要とする。これに水尾城周辺の地質が軟岩質のため通常の土を掘削するより1.69倍の手間があったとしている。運搬は土砂の比重から1t当たり2.2tと計算し、1人1日あたり452.4kgの土を動かせると推定している。そして、仕上げは全体の30%掛かるとして全体作業量を計算している。その結果、水尾城は2867人が必要としている。

この計算値を借用して仕事量を試算してみたい。但し、岩井城周辺の地質は軟岩質とはいえないため掘削にあたっての手間は通常の土砂で計算することとする。

$$\text{掘削} = 526.73 \text{m}^3 \div 0.69 \text{人} = 764 \text{人} \quad (\text{延べ人数は端数以下切上げ})$$

$$\text{運搬} = 1158.81 \text{t} \div 0.4524 \text{t} = 2562 \text{人}$$

$$\text{仕上げ} = 764 \text{人} + 2562 \text{人} \times 0.3 = 998 \text{人}$$

$$\text{合計} = 764 \text{人} + 2562 \text{人} + 998 \text{人} = 4324 \text{人}$$

以上、作業に要した人数は4324人という計算結果がでた。

次に、この数字をもとに先の水尾城と比較を行ない、築城日数について考えてみたい。この人数は水

尾城の約1.5倍である。水尾城では1日あたりの作業動員数を30人前後と推定し、築城日数96日と試算している。水尾城は岩井城に比べかなり小規模で、現実に作業を行うには30人前後が効率的であるかもしれない。これに対して岩井城は面積が広いため大量の人間を同時に動員しても作業に支障はないと考えられる。参考になるかどうかは疑わしいが、兵庫県多紀郡西紀町の内場山城の発掘調査では1日当たり100人弱の人数で作業を進めた。内場山城は岩井城に近い面積規模を持つ城であるので、同時に作業を行える有効人数としてこの数字を参考にすると、43日強で築城が可能となる。これが可能であれば水尾城の約半分の日数で完成することになる。つまり、作業量では1.5倍の手間がかかっているが、動員人数を大規模に出来る強力な築城主体であれば、簡単に完成を見ることが可能となる。このように作業日数の検証については1日あたりの人数の変動によってかなりの差が生じてしまう。従って、盛土の上量計測によって城郭の工事量の漠然とした多寡は出せるものの、築城日数の推計についてはまだまだ議論の余地が残りそうである。

4. 最後に

中世の土作りの山城は、遺構・遺物が少なく、発掘調査を行っても成果を得られることが少ないという声を聞く。しかし、起伏の大きい場所に駐屯地や居住空間を設ける山城遺構は当時としては大きな造成工事を行って築城されていることは疑いがない。このため造成工事の痕跡を客観的なデータで比較検討することは重要な研究課題と考える。

また、居住を主とするような拠点的な遺構と、軍事的な機能が強調された駐屯地・砦として機能する遺構では内部施設に違いが見られる。拠点的な遺構では建物などを中心とする居住施設が完備するが、軍事面が強調される遺構では内部施設は簡素であるのが一般的である。この両者の構造の違いによって工事量に相違が認められることも重要であろう。

以上、築城工事量について項を進めたが今後に残された課題が多い。また、今回は当初から土量計算を目指して作業を行っていないためやや粗い作業となつたことを反省している。

（註）

1. 岸本一郎他「播磨・水尾城跡の調査と研究」西脇市教育委員会 1992年刊行による。

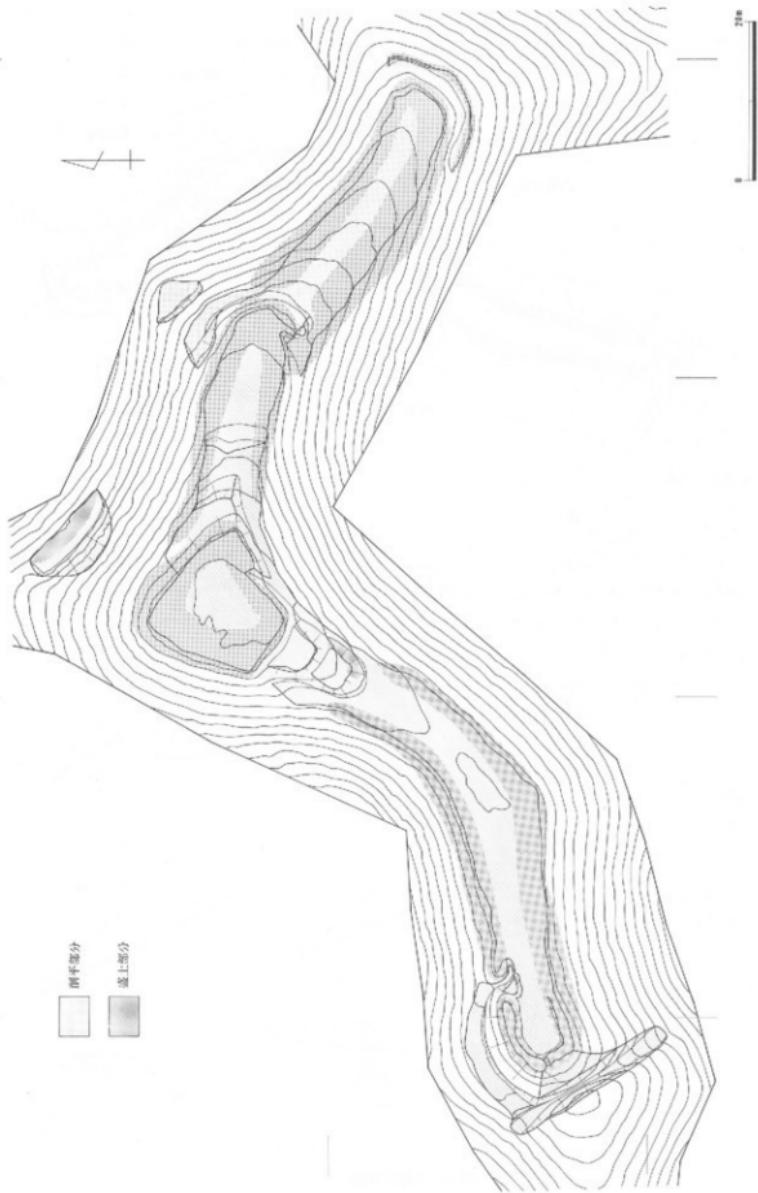


図33 塗土・切土の造成図

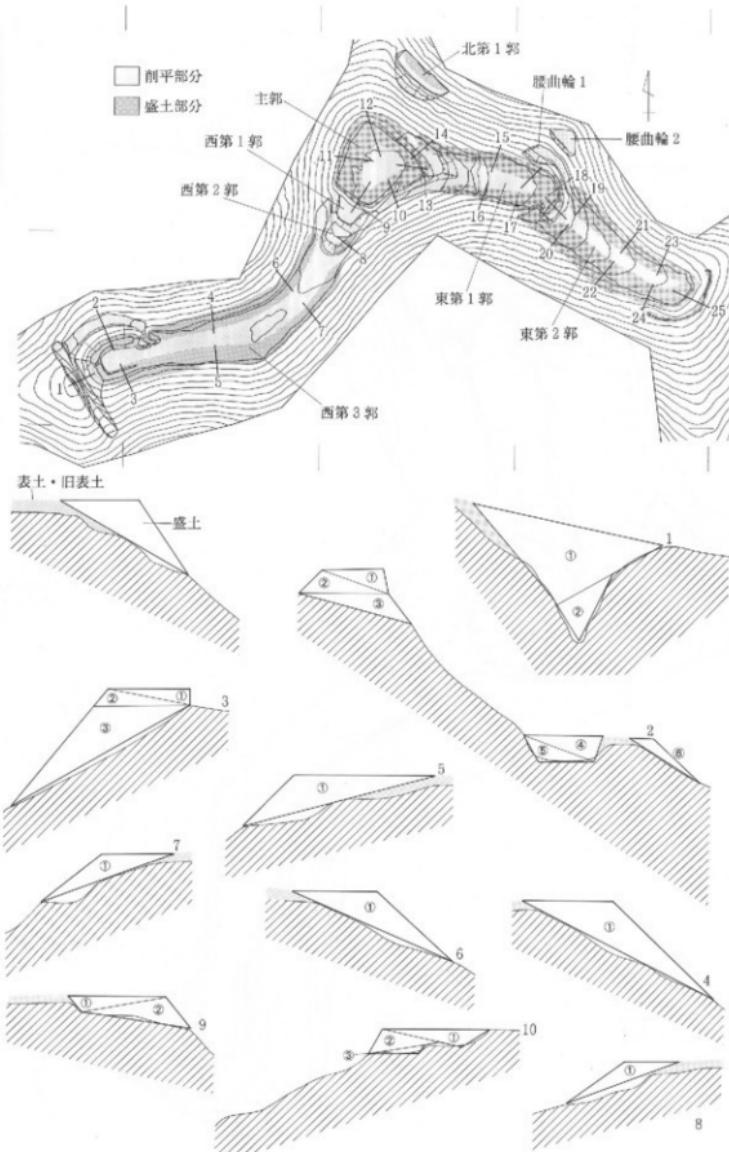


図34 土量計算図（1）

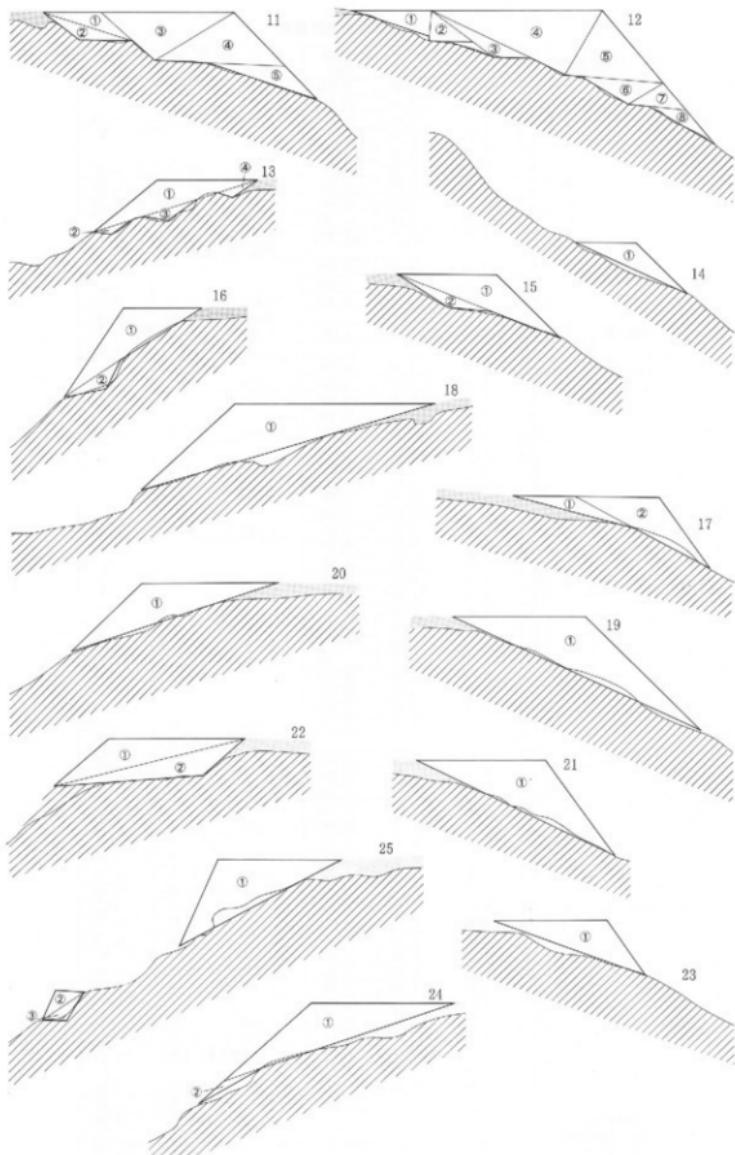


図35 土量計算図 (2)

表3 岩井城跡土量計算表

地・施設名	断面名	底辺 (m)	高さ (m)	倍面積 (m ²)	合計 (m ³)	距離 (m)	土量 (m ³)
西第3郭	2	① 1.40	0.45	0.630			
		② 1.89	0.45	0.810			
		③ 2.40	0.45	1.080	1,260	10.50	13.23
3	①	1.70	0.35	0.595			
		② 2.00	0.35	0.700			
		③ 4.20	0.95	3.990	2,643	15.50	40.97
4	①	4.50	0.85	3.825	1,913	24.00	45.91
5	①	4.10	0.75	3.075	1,538	15.50	28.45
6	①	3.60	0.70	2.520	1,260	14.50	18.27
7	①	2.90	0.50	1.450	0.725	25.50	18.49
					西第3郭の土量合計=		165.32
虎口通路	2	④ 1.60	0.55	0.880			
		⑤ 1.55	0.40	0.620			
		⑥ 1.70	0.25	0.425	0.963	19.00	18.30
					虎口通路の土量合計=		18.30
西第2郭	8	① 2.50	0.40	1.000	0.500	3.50	1.75
					西第2郭の土量=		1.75
主郭	9	① 2.00	0.30	0.600			
		② 2.20	0.55	1.210	0.905	8.00	7.24
	10	① 1.70	0.35	0.595			
11	② 2.00	0.35	0.700				
		③ 4.20	0.95	3.990	2,643	10.00	26.43
		④ 1.40	0.45	0.630			
12	⑤ 1.80	0.45	0.810				
		⑥ 2.40	0.45	1.080			
		⑦ 1.60	0.55	0.880			
13	⑧ 1.55	0.40	0.620				
		⑨ 1.70	0.25	0.425	2.223	7.50	16.67
		⑩ 1.65	0.50	0.825			
東第1郭	⑪ 0.90	0.60	0.540				
		⑫ 2.25	0.30	0.675			
		⑬ 3.50	1.30	4.850			
14	⑭ 2.00	1.35	2.700				
		⑮ 1.70	0.50	0.860			
		⑯ 1.15	0.50	0.575			
15	⑰ 1.50	0.30	0.450	5.583	4.00	22.33	
		⑱ 3.50	0.60	2.100			
		⑲ 0.60	0.15	0.120			
16	⑳ 1.20	0.25	0.300				
		㉑ 0.85	0.20	0.170	1.345	7.50	10.09
					主郭の土量=		82.76
17	㉒ 3.50	0.50	1.250	0.625	10.00	6.25	
		㉓ 2.10	0.70	2.450			
		㉔ 2.10	0.25	0.525	1.488	12.00	17.86
18	㉕ 3.20	0.85	2.720				
		㉖ 1.40	0.35	0.490	1.605	17.50	28.09
		㉗ 2.50	0.30	0.750			
19	㉘ 3.10	0.80	2.480	1.615	5.00	8.08	
		㉙ 6.30	1.15	7.245	3.623	6.00	21.74
					東第1郭の土量=		82.02
東第2郭	㉚ 5.60	1.10	6.160	3.080	10.00	30.80	
	㉛ 4.50	0.85	3.825	1.913	15.00	28.70	
	㉜ 4.50	1.10	4.950	2.475	10.00	24.75	
20	㉝ 4.00	0.65	2.600				
		㉞ 4.00	0.50	2.000	2.300	11.00	25.30
		㉟ 3.35	0.80	2.680	1.340	9.00	12.06
21	㉟ 5.00	0.95	4.750				
		㉟ 1.50	0.15	0.225	2.488	8.00	19.90
		㉟ 3.70	1.20	4.440	2.220	6.00	13.32
					東第2郭の土量=		154.83
犬走り	㉟ 1.00	0.35	0.350				
		㉟ 1.00	0.30	0.300	0.325	20.00	6.50
					犬走りの土量=		6.50
主曲輪北斜面						曲輪土量=	13.00
東第1曲輪北斜面						曲輪土量=	3.25
全体の総合計							526.73

第2節 調査の成果から

中世の時期に各地で盛んに造られた山城は、文献資料の研究あるいは伝承等によって、その関連する氏族およびその主従関係などの研究は早い時期から行われ、在地の有力国人層レベルまでの城跡に関しては概ね系統化されてきている。その反面、中世山城の大多数を占める在地層、いわゆる国人層以下の階層の人々が関連した城跡については、その存在が確認されているのみの状況が永く続いていた。そうしたなか、文献のみではなく現地の踏査を踏まえた城跡の地理的な検討、さらには縄張りを中心とした曲輪の機能・形態の変遷、付属施設の形態変化などの研究が大きく進み、在地性の強いと思われていた城跡の研究が大きな前進をみる状態となっている。こうした研究方法は考古学的な調査手法とも共通する点が多いことから、両者はもはや不可分な関係となっている。特に、最近の山間部にまで及ぶ大規模開発に伴う発掘調査は、小規模な山城跡ならその全域を発掘してしまうケースもあり、文献検討・現地踏査のみでは確認することのできない貴重な資料を提示・研究できる段階に達しつつある。

本城跡の場合も、別名「ヨキギの城=斧研ぎの城」と呼称されているだけで、それ以外に関連する資料はなく、城跡自体の性格・機能とともにほとんど不明確な状況にあったが、そのほぼ全域を発掘調査することにより、今回ここに報告してきたように新たな事実が数多く明らかとなった。そこで、本城跡の構造・立地等を踏まえたうえで、周辺地域の城跡の状況と当時の但馬中部地域の社会情勢とも関連させながら、本城跡の存在意義について推察してみたいと思う。

まず、第II章の周辺遺跡の項目でも一部触れているが、岩井城の築れた戦国期の但馬中部地域（円山川中流域）の社会情勢について、再度簡単に触れてみたいと思う。この時期畿内地域をほぼ制圧した織田信長は西国の大大名毛利氏に対峙するため、その勢力を中国地方へ進展させようとしていた。特に長らく毛利勢力下にあった播磨地域は、織田氏の中国地方進行の足掛かりとして最初にその洗礼を受けることとなるが、地元勢力の抵抗も激しく、天正6年（1578）の別所氏の三木城の落城をもって一応の播磨制圧が完了することとなる。羽柴秀吉は播磨平定の進軍を行つ一方で、永禄12年（1569）但馬へも進攻を行い、この時一気に但馬守護山名氏の居城此隅山城とともに垣屋城等十数の城を攻略し、概ね但馬を手中に治めながら、同じ年の冬には此隅山城敗戦の反省から、天正2年（1574）要害の地城山山頂に石垣を伴う有子山城



鶴城方面を望む

を新たに築城し、そこを居城として領国の守りを整えることとなる。

新興の織田氏と旧来の毛利氏という強大な二勢力の間にあり、この時期但馬の勢力情勢は非常に複雑な状態にあったようである。但馬の守護山名氏は垣屋氏・太田垣氏・田結庄氏そして八木氏の四名の有力国人衆によって支えられてきていた。そのうち、南方方面を押さえる太田垣氏は、永禄13年（1570）いち早く織田方に接近している。南方の播磨から攻め上がってくる織田軍に最も早く囲まれる位置関係にある太田垣氏としてはその力は驚異であり、当然の成り行きかとも思われる。ところが、天正3年（1575）には太田垣輝延と垣屋豊統が毛利輝元と誓紙を交わし、毛利方への傾向を明確とするが、これに對し田結庄は義は織田方に付き、ここにきて山名氏を中心として維持されてきていた但馬の勢力は、織田と毛利の両勢力へと二分されることとなる。この一連の垣屋氏と田結庄氏の対立は、1500年頃の山名家内部における対立に尾を発するものである。垣屋氏は現在の日高町の鶴峯城（秦々前城）を居城とする国衆であり、本来山名氏の執事的な役割を果たし、守護職を補佐する立場にあったが、このころには山名氏と対立するケースが頻繁な状態となっていた。一方、田結庄氏は城崎郡出結莊に本拠を置き、豊岡市の鶴城を居城としていた土着の豪族であるが、山名氏と垣屋氏との対立に伴い、垣屋氏に替わって山名家内部における勢力を増しつつあったようである。

こうした但馬地域の政治情勢下の時期に、岩井城は築かれたこととなる。発掘調査の最終段階で、奈良女子大学の村田修三先生に現地視察を頂き、多くのご指摘・ご指導を頂いたが、調査の最終結果と合わせると、岩井城の曲輪遺構の特徴は以下の7点となる。

- ①：城を構成する各曲輪は、狭い古地域を可能なかぎり広く有効的に利用するために直線的に造られしており、それを成すために主郭を中心としてしかりとした七盛り・切岸が行われている。
- ②：主郭を中心として各曲輪の整形には、攻守にわたる効率性の高い築城法が用いられている。（各曲輪辺部の直線的な整形など）
- ③：主郭および東第1郭には、築城技術的に高いレベルにある「折れ」構造を用いた虎口を設ける。
- ④：特に、西第3郭の土塁間に開く大手虎口は、「食違い虎口」状の形態となっている。
- ⑤：大手虎口に続く横矢掛けは土塁との比高が著しく高く、堅固な作りとなっている。その反面、木來搦手からの侵入を阻止するためにある堀切りが大手側にあり、さらにあえて攻撃側の侵入を容易にするがごとく、その底部から横矢が連続する形態も守備を第一とする築城方法からすれば、相い矛盾するものである。
- ⑥：西第3郭は先端の土塁部分に向って僅かながら高まっている。こうした形態は、天正期の極早い時期に造られた城によくみられる特徴である。
- ⑦：東第2郭と帶曲輪、さらに西第1郭・第2郭には古い古い要素が認められるため、城が最も整備されたのは最終段階の天正2年前後であり、築城は永禄期に遡ると思われる。

上記したような曲輪構造の特徴は、守護大名あるいは有力国人衆の構築した城にみられる特徴的な技法を用いており、天正初期の段階の築城方法としては最先端のものであるため、岩井城の築城にも当然のことながらそうした勢力の関与を考えざるを得ない。具体的には、守護山名氏あるいはそれを支えた四天王と呼ばれる四名の有力国人衆ということになる。ただし、その築城位置から考えても、南部の朝来郡を領地とする太田垣氏、養父郡を配する八木氏は直接的には関与しないものと考えたい。位置的には、残る三氏のいずれにも属した可能性がある。また、但馬地域の代表的な山城の築城法からみて、山腹に所謂欹状堅堀が存在しないことなどから、築城の下限は天正3年（1575）以前と考えられる。そこ

で天正3年までの山名・垣屋・田結庄三氏の情勢を再度検討し、岩井城に直接関与した勢力を確定してみたいと思う。

前記したように、天正の初期には守護大名である山名氏の勢力は完全に衰退しており、攻め出すことを前提として永らく住み続いた此隔山城を放棄し、防衛を第一とした有子山城に引き籠もった状況となっている。その衰退した主人に替わって台頭してきたのが、山名執事役の垣屋氏とそれに取って代ろうとする田結庄氏であった。両勢力は基本的に円山川を挟んで対峙するものの、北部西岸城では、岩井城の位置する山塊部の北側に東西に入り込む奈佐谷地区が両勢力の拮抗する場所であったことが、その支配する城の分布状況から分かる。この地域を押さえていたのが、宮井城を本拠とする篠部氏である。元米、福田城とともに田結庄氏に属していた豪族であったが、後日両城とも垣屋氏に属することとなり、谷口部を押さえる森津・亀ヶ崎の両城をはじめ、奈佐谷地区に散在する城はほとんどが垣屋氏の配下となってしまうようである。

こうした田結庄氏の支配力の低下の原因となったのは、天正3年（1575）の野田の合戦の敗戦にあるものと想定される。この合戦は、山名家内における主導力を損失しつつあった毛利党の垣屋豊統が、その窮地を挽回するために対抗する織田氏の力を借りる田結庄は義を急襲し、その居城鶴城と支城の海老手城を陥落させ、是義を自殺に追い込んだ事件である。これはそのまま、但馬地域における毛利と織田の代理戦争を呈するものであり、天正3年には山名氏（但馬地域）の体制が、織田方と毛利方との間で大きく揺れ動いている様子が見て取れる。天正元年頃、毛利方の吉川元春が但馬を無血占領したのに続き、天正3年5月には毛利氏との間に芸但和睦の同盟を結んでいる。ところが、同じ年の10月には丹波の荻野直正が但馬に侵入し竹田城と有子山城を攻略したのに対し、織田信長が明智光秀を派遣し直正を竹田城に攻めていることから、毛利氏と結んだ山名氏の内部であえて織田勢力に頼ろうとする動きが存在していたことが考えられる。こうした内部での権力抗争が、同年10月の野田の合戦で垣屋氏が田結庄氏を打ち破ることにより、山名氏（但馬地域）は毛利方に与することに決したものと思われる。それを裏付けるように、天正7年（1577）には羽柴秀長による第1次但馬進攻が決行され、南但馬地域が制圧されている。これに対する毛利方は同年に吉川元春が再び支援の軍行を行うが、翌天正8年（1580）4月には秀長による第2次但馬進攻によって但馬地域から毛利勢力は駆逐され、完全に織田方に領有されてしまうこととなる。

以上のように、天正3年は但馬地域にとっては重要なターニングポイントとなる時期であり、そのきっかけが野田の合戦にあったことが分かる。

特出した虎口部分の築造形態、堅堀が設けられていないこと等の発掘調査の結果からみても、岩井城跡がこの天正3年の野田の合戦に備えて築かれた城である可能性が高いようである。地理的には、垣屋氏・田結庄氏の両勢力が拮抗していた奈佐谷より、大きく垣屋氏の勢力範囲内に入り込んだ位置にあるため、当然のことながら垣屋氏が築城したと考えることが自然である。現に城跡に立つと鶴城はもとより、海老手城、宮井城など田結庄陣下の主な城を見渡すことができる絶好の位置にあることが分かる。城跡の西側約300mには、同地区内で最も高い山頂部が存在するにもかかわらず、敢えて一段低い東側の山頂部を築城の地に選択したのは、こうした敵城の見振りの意味合いが大きかったためではないかと思われる。このように考えると、人里離れた山頂部に堅堀に作られた小さな山城である本城跡の存在意義が明確になるとともに、その果たした役割が但馬地域の地域史のみではなく、近世の幕開けにも少なからず関係していることが知れる。



岩井城 全体図

写真図版



1. 遺跡遠景（西から）



2. 岩井城跡全景（北から）



1. 調査前全景（南から）



2. 調査後全景（南から）



1. 主郭全景



2. 土壘・堀切全景



1. 遺跡遠景（北から）



2. 同上（西から）

図版 2



1. 岩井城跡遠景（南から）



2. 同上（東から）



1. 主郭～堀切全景（東から）



2. 主郭～東第2郭全景（南から）



1. 調査前全景（西から）



2. 同上（東から）



1. 堀切調査前



2



3



4
413



5

2. 土壘調査前 3. 同右 4. 虎口調査前 5. 同右

図版 6



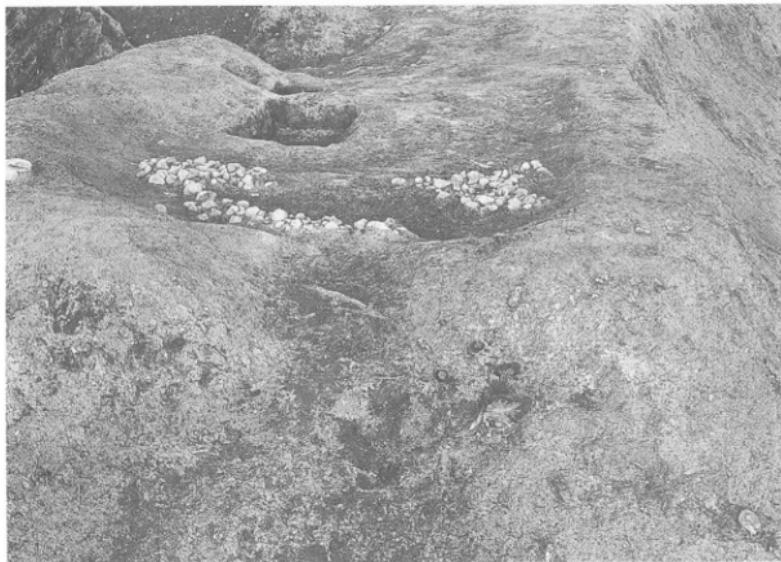
1. 堀切周辺全景



2. 同上



1. 土壠全景



2. 同上

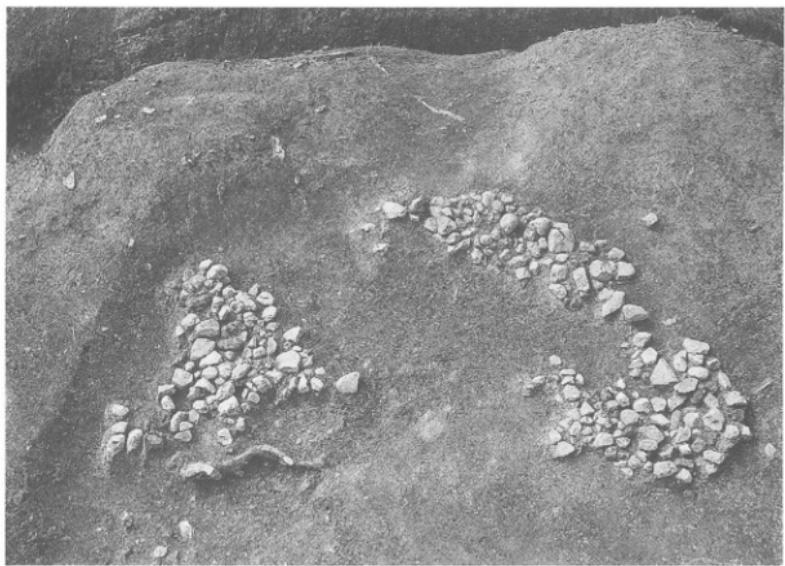
圖版 8



1. 虎口 1 全景



2. 同上



1. 集石 1



2. 同上

図版10



1. 堀切土層堆積状況



2. 堀切完掘状況



1



2



3



4



5



6



7



8

1. 土塁北面土層堆積状況 2. 虎口1土層堆積状況 3～8. 土壘断ち割り状況



1. 土壘周辺盛土除去後



2. 同上



1. 西第3郭調査前



2. 同調査後



1. 主郭～西第3郭調査前



2. 同調査後



1. 主郭



2. 同上



1. 西第1郭・西第2郭



2. 同上



1. 通路1



2. 同上



1. 虎口 2



2. 集石 2



1. 主郭盛土除去後



2. 同上



3



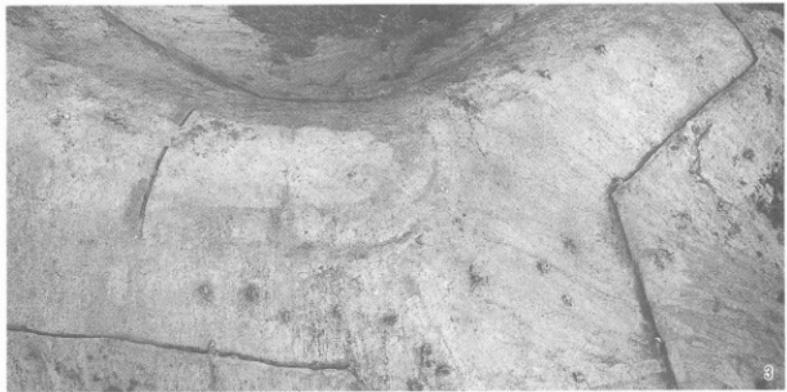
4



1. 東第1郭・東第2郭調査前



2. 同調査後



1. 東第1郭 2. 東第2郭 3. 同上



1. 東第1郭北西端部



2. 虎口3



1. 北東第1・2郭



2. 通路2



1



2



3

1. 北尾根 2. 同上 3. 同上



1. 北第1郭 2. 北第1郭土層堆積状況 3. 北第2郭土層堆積状況 4. 北第2郭



各曲輪平坦部土層堆積状況（1. 西第3郭 2～4. 西第1郭周辺 5. 主郭 6・7. 東第1郭
8. 東第2郭）



1. 古墳全景



2. 主体部完掘状況



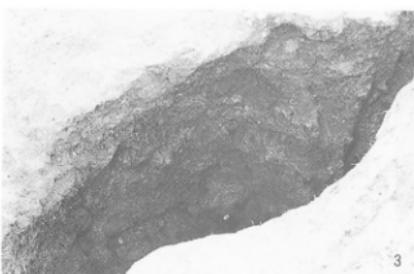
3. 主体部土層堆積状況



4. 鉄鎌出土状況



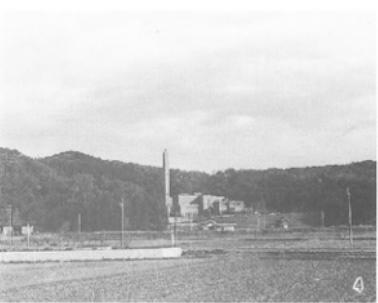
1. 炭窯全景



2. 炭窯全景 3. 炭窯左壁



4. 炭窯煙道部



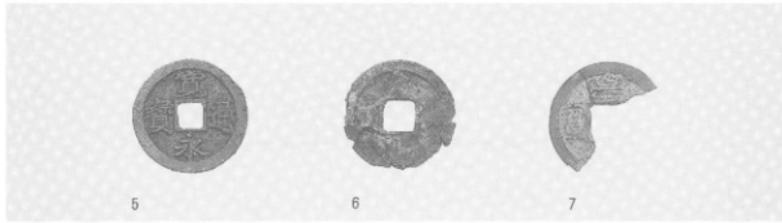
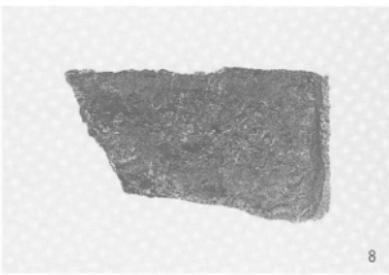
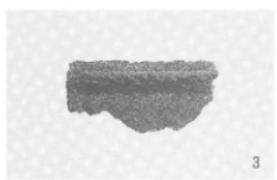
周辺の山城跡（1.比栗山城 2.有子山城 3.亀ヶ崎城 4.尼城 5.三開山城 6.加隈城
7.宮井城 8.鶴城）



1～4. 調査風景



5. 但馬空港



出土遺物

兵庫県文化財調査報告書 第130冊

岩 井 城 跡

但馬空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年3月

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 福田印刷工業株式会社

〒658 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3